

# Vent

音楽教育 ヴァン vol.47

巻頭／詩人と作曲家が語る

谷川俊太郎(詩人)・木下牧子(作曲家)

特集

報告レポート

コロナ禍における授業実践と研修会

開催を終えて

—新作合唱曲による公開講座—

Spring Seminar 2021

参考楽譜

器楽合奏『鉄腕アトム』

(作曲：高井達雄 編曲：千田鉄男)



# 感情のポケット

コロナ禍の今、私たちは自分の感情を相手にストレートに伝えられないことがある。喜びの気持ちを伝えたいのに、大きな声で相手に伝えることができない。喜びの気持ちを伝えたいのに伝えたい相手と会えないということもある。このような場合は、喜びの気持ちを、自分の心のポケットの中にしまい込むことになる。また、本来ならば仲間と共に喜んでいい場面で、仲間の一人がコロナの影響で参加できなければ、素直に喜べないということもある。今、私たちは無意識のうちに心の中に感情のポケットをつくり、感情をしまい込んだり、ため込んだりしている。様々な感情が複雑に入り交じっているときもあるかもしれない。

本号「巻頭／詩人と作曲家が語る」の中で、谷川俊太郎氏は「人間の矛盾した感情を詩として書きたいと考えていた」と語り、木下牧子氏は「そのような感情を音楽で表現したいと思った」と語っている。

感情のポケットは、できることならば一日も早くなくしたいものではあるが、逆の発想で考えると、コロナ禍の今しか持てない感情のポケットは、ひょっとしたら様々な作品や発想を生み出す魔法のポケットになるかもしれない。

齊藤忠彦 (信州大学 教授)

## Contents

- 03 巻頭／詩人と作曲家が語る  
谷川俊太郎 (詩人)・木下牧子 (作曲家)
- 09 特集  
報告レポート  
コロナ禍における授業実践と研修会
  - ・コロナ禍における音楽発表会／西沢久実 (神戸市立神戸祇園小学校 教諭 音楽専科)
  - ・芸術系教科等担当教員等 全国オンライン研修会／萩原史織 (東京藝術大学芸術教科研修推進室 特任助教)
- 18 授業者に訊く  
馬場大輔 (愛知県立松蔭高等学校 音楽科教諭)
- 23 開催を終えて  
— 新作合唱曲による公開講座 —  
Spring Seminar 2021
- 26 Kyogei Presents  
音楽診断 あなたのタイプは？  
[第12回] おすすめ名作バレエ編 (監修・解説：山田治生)
- 28 Information
- 30 参考楽譜  
器楽合奏『鉄腕アトム』
- 38 エッセイ  
新・音から広がる世界 [第7回] 藤原道山



# Shuntaro Tanikawa × Makiko Kinoshita



詩人と作曲家が語る

## 合唱曲『春に』に こめられたもの

詩人 谷川俊太郎

作曲家 木下牧子

合唱曲『春に』は、発表から30年以上の月日がたった今も全国で愛され、歌われ続けており、教育芸術社の令和3年度『中学生の音楽2・3下』にも掲載されています。今号では、この作品をつくり出した詩人の谷川俊太郎先生と、作曲家の木下牧子先生が、過去のご自身の創作活動を振り返りながら、詩や音楽、合唱などについて語ってくださいます。お2人による貴重なお話は、表現するということは何かとあらためて考え直したくなるような内容でした。コロナ禍でいつもどおりに歌うことが困難な状況だからこそ、歌や合唱のすばらしさを再認識していただけたら幸いです。

進行 坂元勇仁 (レコーディング・ディレクター)

撮影：鳥嶋信一

人間の矛盾した感情を  
詩として書きたいと考えていました。  
最初の頃は、子どもたちから  
よく質問をもらいましたが、  
4～5年たってからはなくなりました。  
音楽の力で、納得できちゃったんですね、  
きっと。



○ 谷川俊太郎(たにかわ・しゅんたろう)

1931(昭和6)年東京生まれ。1950年『文學界』に「ネロ他五篇」を発表して注目を集め、1952年に処女詩集『二十億光年の孤独』を刊行、みずみずしい感性が高い評価を得る。以降、2021年6月現在まで数多くの詩集、エッセイ集、絵本、童話、翻訳書があり、脚本、作詞、写真集、ビデオなども多数手がける。その詩は海外でも広く支持されている。読売文学賞を受賞した詩集『日々の地図』をはじめ、詩集『62のソネット』『定義』『世間知らズ』『ことばあそびうた』『よしないうた』『夜のミッキー・マウス』『トロムソコラージュ』『ページュ』、翻訳に『マザー・グースのうた』など、著書多数。

## 書かれたのは人の感情

**坂元:**『春に』は全国の多くの学校の子どもたちに歌われています。どのようなきっかけで、この詩を書かれたのですか？

**谷川:**雑誌で依頼されて書いたものです。

**坂元:**1983年に理論社から出版された『谷川俊太郎少年詩集 どきん』に「春に」が収録されていますが、それよりも前に書かれた作品ですか？

**谷川:**本として刊行されたのはその詩集が最初ですが、書いたのは雑誌のためです。雑誌は季節感が重要なので、僕もそのことを大切にしました。もちろん「春に」は、歌詞としてはなく、詩として書いたものです。

**坂元:**詩を書かれたときの思い出はありますか？

**谷川:**当時、世間に出ている歌や詩は、単純なものが多かったように記憶しています。明るい曲には明るい歌詞ばかり。暗い曲には暗い歌詞。1つの作品に、相矛盾する感情が入っていることがあんまりなかった。でも僕は、人間の感情の中には、常に矛盾したものを含んでいると思っていて、そ

れを詩として書きたいと考えていました。

**坂元:**それが、詩に反映されたのですね。

**谷川:**そうです。あの頃はそのような考えがはっきりとありました。ふだんは、そう考えて書くことはないんですけど。

**坂元:**この詩を読み手や歌手がどのように捉えるのか、気にされたことはありましたか？

**谷川:**子どもたちが詩を読んだとき、納得してくれるかな、というのはちょっと考えました。そしてやはり、子どもたちが歌ってくれるようになってからは、よく質問をもらいました。「『よろこびだ しかしかなしみでもある』って、なぜうれしいのに悲しむの?」と。「人の感情というのは、いろいろなものが混じって、矛盾しているものだからだよ」と答えていましたが、4～5年たってから質問はなくなりました。音楽の力で、納得できちゃったんですね、きっと。



『谷川俊太郎少年詩集 どきん』  
理論社 1983年2月発行  
定価1,815円(本体1,650円+税10%)  
著者:谷川俊太郎 絵:和田誠

「春に」を読んだ瞬間に「見つけた!」と思いました。  
谷川先生の詩は、それ自体が強い力をもっています。  
この詩でなくては!とほれこんで選んだ詩に、  
真剣に取り組む覚悟をもって  
作曲するようにしています。  
この詩に出会えて幸運でした。

## 詩を音楽にすること

**坂元:**「春に」を木下先生が合唱曲にしたのは、どのようなきっかけでしたか?

**木下:**実は『春に』を書くまで、中学生のための合唱曲は書いたことがありませんでした。初めて書いた本格的な合唱作品は、大学の混声合唱団から依頼された『方舟』という組曲でした。彼らは声楽家ではありませんが、合宿を行って、どんなに難しい曲も歌いこなしてしまうので、私も変拍子や転調を入れて、難易度高めの合唱曲を楽しんで書いていました。すると、出版社の方から「今いちばん日本で合唱曲を歌うのは中学生ですが、木下さんの曲は音域が広すぎて中学生には歌えません。詩の選び方もマニアックだから、誰もが共感できる詩を使って、音域も狭くして、中学生にも歌える深い歌を書いてほしい」と、難しい依頼を受けました。制約の中で書くのは初めてでしたが、おもしろそうとも感じました。

**坂元:**のびのびとした音楽ですが、制約を受けて書かれたものだったんですね。「春に」を初めて読んだときの印象はいかがでしたか?

**木下:**谷川先生の詩集『どきん』はすでに持っていたんです。和田誠さんによる表紙のかわいらしさから、子ども向けの詩集だと思っていましたが、じっくり読むと大人の胸にも響く詩が多い。その中に収録された「春に」を読んだ瞬間に「見つけた!」と思い、書き始めました。谷川先生がおっしゃるとおり、詩に込められた喜びや悲しみ、怒りの感情があり、それらが互いにせめぎ合いながら徐々に高まっていく様は、音楽で表現するのにとても向いていると思ったんです。この詩に出会えて幸運でした。

**坂元:**合唱曲として発表されたのが1989年とのことですが、書かれたのはいつ頃ですか?

**木下:**出版社の委嘱でしたので、書き下ろしたのは出版直前です。私としては、とても自然に気持ちよく作曲できました。

**坂元:**書きやすい詩と書きにくい詩、両方あるかと思いますが、「春に」はどちらかといえば書きやすかったということでしょうか?

**木下:**そうですね。何度も朗読するうちに、自然に音楽が流れ出てきた感じです。ただ、シンプルだから書きやすいわけではないですし、複雑だから書きにくいわけでもありません。



○ 木下牧子(きのした・まきこ)

東京都生まれ。管弦楽から吹奏楽、ピアノ曲までその活動は幅広く、特にヴァラエティ豊かな声楽作品は抜群の人気を誇る。今までに、毎回異なる編成で5回の作品展を開催。とりわけ2019年に開催したオーケストラ作品展は大好評を博した。東京藝術大学作曲科首席卒業、同大学院修了。日本音楽コンクール作曲部門(管弦楽曲の部)入選。日本交響楽振興財団作曲賞入選。三菱UFJ信託音楽賞奨励賞受賞。

ん。そして音楽が詩に寄り添いさえすればよい曲になるわけでもないんです。単に寄り添うだけなら、詩のみを朗読する方がずっとクリアに内容が伝わりますから。音楽を付けるからには、選んだ詩に最大限の敬意を払うのは当然ですが、そのうえで、詩と音楽が合体して「1 + 1 = 3」となるような曲を目指さなければいけないと思っているんです。それが理想ですね。もっとも、もし私が詩人で、自分の大事な詩に対して作曲家から「コラボして1を3に」などと言われたら、相当むっとするでしょうけど……。

**谷川:**僕は、自分の詩が歌になることは、基本的にうれしいんです。だいたい詩というのは、活字で本の上に寝ているわけです。その活字が立ち上がって、メロディーとかハーモニー



谷川俊太郎先生所蔵の『日本語のおけいこ』(理論社)

※絶版。現在は岩波書店より詩集を電子書籍で購入可能

になって空にのぼっていくみたいなイメージがあるのね。詩の世界が広がるんです。『春に』は、聴いた人みんなが気に入ってくれて、僕もすごく好きになりました。

## 作曲家との創作

**坂元:** 谷川先生が音楽に関わるようになったきっかけは何ですか？

**谷川:** 音楽に関わるようになったのは、『さとうきび畑』で有名な作曲家の寺島尚彦さんと、子どものための歌をつくったのが始まりです。1人で現代詩を書くだけでは、生活はできませんからね。仕事として、同世代で親しかった寺島さんと2人でつくり、彼の家で録音していました。

**坂元:** お2人のオリジナル作品を作っていたのですね。

**谷川:** はい。今もその歌を口ずさむことがありますね。楽譜集になっている『日本語のおけいこ』です。

**坂元:** 歌としては、この『日本語のおけいこ』が出发点ですね。出版年は1965年のようですが、寺島先生とは昔からの知り合いだったのですか？

**谷川:** 群馬県の北軽井沢に、法政大学関係の人が小屋を建てて住んでいる「法政大学村<sup>\*1</sup>」という場所があって、そこに寺島家もいたんです。僕たち同世代なものだから、キャンプファ



○ 坂元勇仁(さかもと・ゆうじ)

レコーディング・ディレクター、大阪芸術大学客員教授、東京音楽大学特任講師。学習院大学大学院修士課程修了。ビクターエンタテインメント株式会社ディレクターを経て、ユージン・プランニング代表取締役。主な制作作品として『原典による近代唱歌集成：誕生・変遷・伝播』『アジアの音楽と文化』(ともにビクターエンタテインメント)などがある。著書に『明日も会えるのかな？ 群青 3.11が結んだ絆の歌』(パナムジカ)など。



取材は谷川俊太郎先生の自宅で行われた

イヤーなんかして、ワインを飲むというような付き合いがありました。

**坂元:** そうだったのですね。子どもに関わるお仕事としては、その後『マザー・グースのうた』の翻訳もありました。

**谷川:** この翻訳には、寺島さんや林光さんだけでなく、多くの作曲家が曲を付けてくれました。

**坂元:** 以前、谷川先生に依頼して、グリーグの曲にすばらしい詩を付けていただいたことがありました。あのときは、既に曲があったので、曲先のお仕事となりましたが、他にもそのようなお仕事をされたことはありましたか？

**谷川:** あまりないですね。『鉄腕アトム』は曲先でしたけれど。

**坂元:** 子ども向けのお仕事もされていた一方で、先生は「実験工房<sup>\*2</sup>」にも携わっていらっしゃいました。

**谷川:** 作曲家の湯浅譲二さんのお仕事ですね。彼が行っていた現代音楽のプロジェクトで、合唱曲をつくるので何か書いてほしいと依頼を受けました。一般的な合唱曲ではなくて、合唱の構造そのものを書くという、前衛的なものでした。

**坂元:** ステレオ・テープのための『ヴォイセス・カミング』にも関わられたとか。すさまじい曲で、先生がふだん書かれるものとは違う世界のように感じました。

**谷川:** 前衛的なものは大好きなんです。とてもおもしろい経験でした。当時世間で歌われていた合唱曲は、日本語の歌詞がきちんと聞き取れないものでした。僕はそれが嫌で、前衛の詩ではあっても聞き取れるように意識しました。

\*1 1928年、法政大学学長の松室 致<sup>まつむらひむたす</sup>氏が所有する広大な土地を法政大学の教員に坪1円で分譲したことから始まる村。谷川俊太郎先生の父親で法政大学第10代総長の谷川 徹三氏の他、文学界に携わる著名人が移り住んだり家を建てたりした。現在も夏になると、多くの文学者がこの地で創作活動を行っている。



## 日本語への意識の変化

**坂元:** 今、谷川先生がおっしゃった、歌曲や合唱曲での日本語の在り方については、どのようにお考えですか？

**木下:** 私が音大生の頃、声楽家にとって重要視されていたのはイタリア語、ドイツ語で、日本語をきちんと勉強するような場はあまりなかったと思います。クラシック系だと、一昔前の悪い例は2つ。クラシック発声で、日本語の特徴を考えずに歌ってしまい、声はよいが歌詞が聞こえない例と、言葉を大切に喋り言葉の発声のまま大声で歌って喉を痛めてしまう例。よい発声と言語の特徴を掴むことは両方大切です。とはいえ、ここ10年くらいで、日本語に対する意識はかなり上がってきていると思います。

**谷川:** 僕も昔は、日本語の歌にベルカントは適していないと思っていました。ある意味、歌詞を尊重してくれていなかった時代だったという気がします。けれど、日本でもミュージカルなどが盛んになり、今では音楽にのった日本語も聞こえるようになった印象を受けます。

**坂元:** マイクを使用して拡声することは、日本語をはっきり聴かせることにもつながりますからね。

**谷川:** そのように、音楽の中で言葉を聴かせる場が増えたことから日本語が大切にされるようになったと、素人なりに思いました。

**木下:** 最近合唱でも、日本語の歌詞を大事にしていますね。

ただ最初に歌詞の分析をしたり意味を確かめたりするのに、音楽を仕上げる段階でだんだん歌詞の存在を忘れてしまい、最終的に歌詞が沈んで聞こえない状態になってしまうことが案外多いです。出来上がった音楽に対して、最後にもう一度言葉の意味や流れを再確認して、乗せ直す作業が大切ですね。

**坂元:** 詩の学習や朗読は、歌とはまた異なる表現ですので、言葉から音楽への移行が難しいのかもしれないですね。

## 大人も子どもも喜ぶように

**坂元:** 木下先生は以前から谷川先生のさまざまな詩に曲を付けられていますね。

**木下:** 谷川先生の詩集は今やほとんど持っていると思います。いちばん最初『春に』を書く際、「曲にしてもよいでしょうか」と先生にお手紙をお送りしました。すると、とても気さくにお葉書をいただいて「これからはどの詩を使ってもいいから、手紙を送ってくださらなくていいですよ」と。緊張していたのでほんとうにうれしかったです。それ以降は、お言葉に甘えて、先生に伺わずにたくさん詩を使わせていただいております。

**坂元:** どの詩でも曲になってよいとお考えですか？

**谷川:** はい。僕の場合はもう、ありがとうございますと思っています。現代詩の詩集って、あまり売れないけれど、曲が付くと少し売れるじゃないですか(笑)。そうして読んでもらえるだけでもうれしいわけです。

**坂元:** 谷川先生は、子ども向けの詩、現代詩、それぞれを書くときにご自身の中で変えることはありますか？

**谷川:** 子ども向けの詩については、難しい漢字や単語は避けるとか、あまり大人っぽい恋愛詩は書かないとか、技術的な制約はある程度ありますけれど、「詩」として考える場合に区別は付けません。大人が喜ぶものでないと子どもも喜ばないし、どちらかだけが喜ぶものはつまらない。自分の中で「これは子ども向け」「これは大人向け」という区別はありません。

**坂元:** 木下先生は、谷川先生の詩にどのような印象をもっていらっしゃいますか？

**木下:** ヴァラエティ豊かで、とても一言では語れませんが。初期の「20億光年の孤独」「62のソネット」などの瑞々しさとか、「タラマイカ偽書残闕」などの原始的なパワーとか、全てひらがなでつづられた一見シンプル、でも哲学的な深さを持つ多くの詩とか、一貫して言葉の選び方がすばらしいと感じます。作曲家の立場で一つ思うのは、谷川先生の詩は、それ自体が強い力を持っているということです。独特のリズムというか。先生の詩にもともと存在するリズムがあるので、軽

い気持ちで音を付けると、音楽が詩に負けてしまう。この詩でなくては！とほれこんで選んだ詩に、真剣に取り組む覚悟をもって作曲するようにしています。ですから『春に』をはじめ、私が谷川先生の詩をテキストに書いた曲は、本当に多くの方々に歌っていただけてうれしいのですが、曲数は実はそんなに多くないです。

## 外からの刺激で作品が生まれる

**坂元:** 木下先生は、谷川先生の詩を用いたご自身の曲の中で、特に気に入っている作品はありますか？

**木下:** 歌曲で使わせていただいた詩で、『小さなスフィンクス』。ハイハイしている赤ちゃんに父親が「こんなにはっきりした生への意志を持って、きみはどこへ行くのだろう？」という哲学的な問いかけをするんです。詩人である父親の視点がとてもおもしろいなど。この詩を中心に『父の唄』という歌曲集を書きました。

**谷川:** 最初の子どもが生まれたときに書いた詩でした。

**木下:** 『しぬまえにおじいさんのいったこと』も大好きです。人生の最後に、ずっと好きだった、たった一人の女性を想う様子が、胸にじーんと来ます。この曲も歌曲集で出版させていただき、とても気に入っています。言葉の選び方がすばらしいと思うのは『あお』です。「よるのやみにほろぶあおはあさのひかりによみがえるあお」という出だしで、青のグラデーションが目に見えようです。

**谷川:** 絵があったんですよ、「あお」が。

**木下:** だからすごく色彩的な詩なんですわ。

**坂元:** 美術からインスピレーションを受けることは多いのですか？

**谷川:** いいえ、僕はクラシック音楽から受けることがいちばん多いです。それから外に出たときに目に入る風景や建築からでしょうか。詩というものは、中から湧いてくるのだけれど、基本的に外からの刺激で生まれると思います。

**坂元:** 音楽を多く聴くようになったのは、いつ頃からですか？

**谷川:** SPレコードの頃からずっとです。SPだと片面3分程度でしょうか？ 長い曲を聴いていると、「このパッセージがいい」と、ある部分だけを気に入るわけ。そうすると、そこばかり聴いてしまう。その癖で、CDも気に入ったものをリピートしちゃうんです。曲の聴き方としては邪道で申し訳ないのですが、そのように自分の琴線に触れるフレーズを繰り返し聴くことが多いです。今よく聴くのはヘンデルやハイドンです。特に器楽曲が好きですね。

**坂元:** 音楽を聴くのは、どのようなときですか？

**谷川:** 聴きたいときにだけ聴きます。好きな音楽を聴くと癒やされますが、静かなほうがいいときもあるからね。

**坂元:** ありがとうございます。最後に、子どもたちや若い人たちが谷川先生の詩を歌っている姿を長い間ご覧になってきて、感じることはありますか？

**谷川:** 昔と比べて皆さんとにかく、日本語がきちんと聞こえるように歌ってくれているなあと思います。

**木下:** ほんとうに最近は言葉に対する意識が高まっていると思います。自分の心に気持ちを込めることから一歩進んで、聴き手に伝えるための具体的なテクニックを磨けば、さらに共感を呼ぶと思います。

谷川俊太郎先生が作詩された『鉄腕アトム』主題歌の器楽合奏(千田鉄男編曲)の楽譜を、本誌「参考楽譜」に掲載しました。ぜひ併せてご覧ください。



谷川俊太郎先生、木下牧子先生、坂元勇仁氏。本記事の取材は2018年に行いました。

特集

報告レポート .....

# コロナ禍における 授業実践と研修会

コロナ禍が長く続いている現在、学校現場では制限される中でさまざまな工夫や提案をしながら音楽の授業を行っていることと思います。そこで今号では、2020年度に実施された授業実践と研修会の報告レポートをご紹介します。前半は、神戸市立神戸祇園小学校の西沢久実先生による音楽発表会の報告です。音楽会までの流れや指導法をまとめていただきました。実際に使用された資料もご覧いただけます。後半は、大学教員と芸術家による実技研修の場「芸術系教科等担当教員等全国オンライン研修会」の報告です。研修内容や講師の伝えたポイントをご紹介します。

# コロナ禍における音楽発表会

～感染予防対策を徹底し、音楽科の学習の様子を発信するための工夫～

神戸市立神戸祇園小学校 音楽専科 西沢久実  
『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』専門的作業等協力者

はじめに

昨年度の音楽会は、学年ごとの音楽発表会になりました。私は、以前より、「音楽会は、日頃の音楽科の学習の様子を発信する場」という強い思いをもつてのぞんでいました。そのため、コロナ禍においても、状況に応じた無理のない学習指導計画を立て、プログラムを工夫しました。今年度も、音楽会の時期が近づいています。少しでも参考になれば幸いです。令和2年度、本校の1年生の実践を紹介いたします。

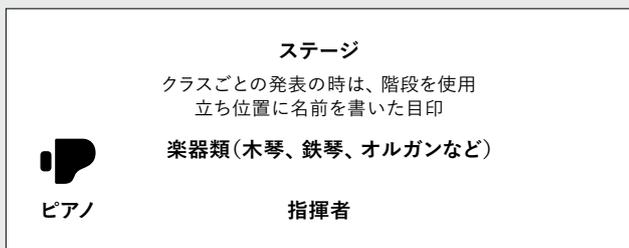
## 令和2年度 神戸市立神戸祇園小学校 音楽発表会 第1学年 プログラム(40分の内容)

- 1 | 学年全員 ボディー・パーカッション《ラデツキー行進曲》 CDに合わせて
- 2 | 学年全員 「手拍子回し」4クラス同時に始める。一人1回手を打った後、体操座り。
- 3 | クラスごと 創作音楽物語『BUNBUNの冒険』

- |    |               |    |                  |
|----|---------------|----|------------------|
| 1組 | みんなあつまって      | 2組 | ちょうちょうさん と こんにちは |
| 3組 | かえるさん と こんにちは | 4組 | たのしかったな おうちにかえろう |

● コロナ感染予防対策のため、昨年度は、当日まで学年全員で集まって合わせることはできない状況でした。しかし、音楽発表会では、《ラデツキー行進曲》の拍を感じ取りながら、学年全員でボディー・パーカッションをすることにより、一体感が生まれました。また、手拍子回しは、4クラスが一斉に打つので、4つの音が少しずつずれて面白いリズムと動きが生まれました。創作音楽物語『BUNBUNの冒険』は、どのクラスも《ぶん ぶん ぶん》を挿入しました。同じ教材に取り組んだことにより、互いに聴き合って工夫点を見付け合う学習が深まりました。そして、学年全員が一体感を味わえるプログラムとなりました。

## 音楽発表会の隊形の工夫



1年1組の児童席	1年2組の児童席	1年3組の児童席	1年4組の児童席
ボディー・パーカッションと手拍子回しは、保護者の方を向いて演技	ラインを貼り、児童分のシールを目印に、体操座り		

保護者席  
パイプ椅子

● 児童は、方向転換しやすいように、体操座りにしました。床には、文科省ガイドラインを守り、間隔をとってラインを貼り、簡単にソーシャルディスタンスをとることができるようにしました。クラス発表では、階段も使って、距離をとって並びました。

## コロナ禍における音楽発表会について 保護者の理解を得るために 発信した内容

音楽発表会について、保護者の理解を得るために、学校だよりや音楽だより、開始前の挨拶で、次のようなことを発信しました。

- コロナ感染予防のため学年全員でステージに並ぶことができないので、学年演技は、フロアで行うこと。顔が見えにくいですが、学年全員で音をそろえる時間を楽しみたいと思い、ボディー・パーカッションや手拍子回しをプログラムに入れたこと。
- 1年生全員が、同じように学習を進めるため、どのクラスも《ぶん ぶん ぶん》を学習した後、クラスごとに工夫して音楽物語にしたこと。音楽発表会では、その工夫を見付け合う場にもしたいこと。
- 体育館での学習(入退場や並び方、学年合同演奏)はしていないので、途中で声掛けしながら、普段の授業のように進めていきたいこと。



クラスごとに発表し、他のクラスと聴き合う場面

▶ 床には間隔を空けてラインを貼り、そのライン上に人数分のシールも貼りました。シールを目印に左右のつまさを揃えます。椅子は使わずに、座ったり立ったり、向きを変えたりしながら、発表しました。



ボディーパーカッションの場面

▶ 学年全員で拍に合わせて、一体感を感じ取りました。初めての音楽発表会でしたが、並ぶ練習をしなくても、ラインとシールを目印にソーシャルディスタンスで整列できました。

## IV 創作音楽物語『BUNBUNの冒険』の構成のポイント

● どのクラスも全員が、オルガン、木琴、鉄琴、トーンチャイム、小物打楽器(タンブリン、トライアングル、すず、カスタネット)を経験した後に、希望楽器を振り分けるようにしました。これまでの音楽経験値の差が大きいことを踏まえ、すべての児童が一通り、どの楽器も学習することができる教材として《ぶん ぶん ぶん》を選びました。

● どのクラスもまねっこ遊びを取り入れ、集中して聴く場を設定しました。  
【まねっこ遊びの例】

Aさん	全員	Bさん	全員	Cさん
♪♪♪	♪♪♪	♪♪♪	♪♪♪	♪♪♪

↑ Aさんがつくる                      ↑ Bさんがつくる                      ↑ Cさんがつくる

誰かが、拍にのれないリズムになったとしても、みんなが真似てつなぐようにしました。そうすると、表現したリズムをすべて認めることになり、誰もが安心して参加できるようになりました。全員が聴き取って真似る場面も設定し、みんなで創り上げる気持ちを大切にしました。

● 《ぶん ぶん ぶん》では、クラスごとに拍子やリズムを変えました。同じ曲でも、クラスごとの表現が違うので、互いに見せ合うと、工夫に気付くことができました。

● 4クラスの場面をつなげて、1つの音楽物語になるようにしました。「ビブラスラップを使ってだんだん音を重ねる」「ちょう ちょう」では、《ぶん ぶん ぶん》よりもゆったりと体を動かすというように音楽を形づくっている要素をおさえながら、音楽物語を構成しました。

## V 創作音楽物語『BUNBUNの冒険』抜粋

[ ] 次は、音楽物語《BUNBUNのぼうけん》です。

[ ] みつばちのBUNBUNは、みんなとぼうけんにでかけます。

[ ] いい天気だなあ

[ ] みんな ぼうけんに でかけよう

[Aグループ] ↓ビブラスラップ (自由に)

[全員] 羽の動き

～中略～

[ ] みんなでまねっこ遊びしよう

[Bグループ] ↓トライアングル (4拍分のリズムをつくる)

[全員] ↓まねっこ遊び

～中略～

[ ] たのしくなってきたね。

[Cグループ] ↓トライアングル (指揮者の手が、1周している間に1回打つ)

[ ] みんなでおどろう

[全員] クラスで工夫したりリズム打ち

[全員] 合奏《ぶん ぶん ぶん》(クラスの変奏)

[教師] 1組さんは、トライアングルやビブラスラップを使っていましたね。手の動きで、元気な様子が伝わってきました。次は2組さんです。さて、BUNBUNは、誰と出会うのでしょうか？

♪=音遊び

終わりに

今年度の音楽発表会は、ワクチンの接種も広まり、昨年度よりは見通しが立つようです。2年生になった子どもたちには、クラスごとに学習した曲を学年全員で輪奏するなどの経験の場を設定したいと考えているところです。コロナ禍における音楽発表会の運営を通して、予測が困難な時代を生きるために、柔軟な対応が必要なことを実感しています。



西沢久実(にしざわ・くみ)  
神戸市立神戸祇園小学校教諭(音楽専科)。文部科学省国立教育政策研究所制作『小学校音楽映像指導資料』(H.27)作成協力者。平成30年度神戸市文化活動功労賞受賞。



開会式(2019年度)



開会式(2020年度)

# 芸術系教科等担当教員等 全国オンライン研修会

主催：文化庁 共催：全国芸術系大学コンソーシアム及び協力大学

この研修会は、文化庁の委託事業として全国芸術系大学コンソーシアムが企画、実施しているものです。スタートした2019年度は、東京、京都で全国研修会、地区6ブロックで地区ブロック研修会を開催しましたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、全国オンライン研修会(2回開催)に一本化されました。58大学が参加する全国芸術系大学コンソーシアムでは、「芸術教科研修会運営会議」を設置し、文化庁、視学官・教科調査官と緊密に連携しながら、学習指導要領の趣旨を踏まえつつ、各大学の特色を生かしたプログラムを提供しています。

授業実践と結び付いた実技研修、新しい教材や指導法の開発・提案などを大学教員や芸術家たちが担当する本研修会では、さまざまな学び合いが生まれています。受講生である教員たちは言うまでもなく、講師を担当する芸術の専門家たちにとっても、多くの気づきや発見があります。また、コーディネータ的な役割を担う私たちにとっても、異分野、他大学のメンバーと出会い協働する本研修会は、音楽教育の世界だけでは経験できない新たな刺激を受ける学びの場となっています。

佐野 靖(東京藝術大学教授・社会連携センター長)

表 音楽分科会・テーマ別実践研修の内容一覧

担当		テーマ	内容
第1回	第2回		
●	●	<b>研修①</b> 音楽づくりの実践と授業研究を通して音楽づくりの新たな指導法、授業展開の視点や方法を探究する 対象：小学校音楽科担当教員等 担当大学：東京藝術大学 講師：石上則子(日本女子大学)、市川恵(早稲田大学)	コロナ禍の現状を考慮し、音楽づくりの中でも声や共有楽器を使用せずに実施可能なボディー・パーカッション等を取り上げ、演習を交えた実践事例の紹介と解説がなされた。また、学びの連続性を検討するという点から、中学校における創作授業の事例が紹介・分析された。 1：音楽づくりの実践提案と実技演習 2：音楽づくりの実践事例の紹介と解説/評価 3：中学校における創作の実践事例の紹介と教室談話の分析
●	●	<b>研修②</b> 学習指導要領を踏まえた授業づくりを考える デジタルデバイスによる音楽づくり(基礎～) 対象：小学校音楽科担当教員等 担当大学：エリザベト音楽大学 講師：志民一成(文化庁教科調査官) 福原之織・川上統・壬生千恵子(エリザベト音楽大学)	受講者の質問を出発点に授業づくりに関わり、考え方を検討したもの(1)、創作用ICTツールを使用し音楽づくりの授業を実践・展開するアイデアを探ったもの(2)、パイプオルガンの仕組みや奏法の解説(3)の大きく3つの内容より構成された。 1：学習指導要領を踏まえた授業づくりを考える 2：デジタルデバイスによる音楽づくり(基礎～) 3：パイプオルガンの世界をのぞいてみよう
●	●	<b>研修③</b> 「我が国の伝統音楽」の鑑賞に関する教材や指導法、授業展開の視点と方法を探究する 対象：中学校音楽科・高等学校芸術科音楽担当教員等 担当大学：徳島文理大学・東京藝術大学 講師：藤原道山(尺八演奏家)	我が国の伝統音楽の「鑑賞」に焦点をあて、日本音楽の様々な種目の特徴や歴史的背景、聴きどころと聴かせ方のポイント等が解説・提案された。また、講師が行ったアウトリーチ授業の様子が紹介され、受講者も同じ内容を体験した。 1：我が国の伝統音楽における鑑賞のポイント 2：講師による授業実践(アウトリーチ)を例に授業づくりに生かせる視点と方法を考える
●		<b>研修④</b> 創作の実践と授業研究を通して創作の授業の新たな視点や方法を探究する 対象：中学校音楽科・高等学校芸術科音楽担当教員等 担当大学：東京藝術大学 講師：アベタカヒロ(作曲家)、佐野靖(東京藝術大学)	受講生である教師一人一人が創作を体験することを通して、授業の工夫と改善に結び付くアイデアや方法を学び、創作指導の可能性と課題について検討した。講師に迎えた作曲家のアベタカヒロ氏より、中学校での創作授業の実践事例が紹介され、その2つの実践に受講生自身が取り組み、発表した。 1：講師による創作の授業実践例に学ぶ 2：創作指導の方法の提案と実践 3：創作指導の可能性と課題
	●	<b>研修⑤</b> 生徒の主体性を引き出す「創作」及び「鑑賞」の指導法について一感性を働かせた深い学びを促す教師の「働きかけ」と「伝え方」 対象：中学校音楽科・高等学校芸術科音楽担当教員等 担当大学：東邦音楽大学 講師：荻久保和明(東邦音楽大学)	「創作」と「鑑賞」に焦点をあて、作品を読み解く視点(作曲家の表現意図を探る、作曲家と演奏家それぞれの思いが作品の中でどのように関わり合っているかを考える)や、生徒の主体的な学習を促すため発問や働きかけの工夫等が解説・提案された。 1：「創作」の指導への新しいアプローチ 2：「鑑賞」の指導への新しいアプローチ 3：教師の「働きかけ」と「伝え方」

※所属は、研修会が実施された2020年度時点のもの。

# 専門家の生きた言葉や 音楽に対する眼差しから学んだこと

萩原史織（東京藝術大学特任助教）

## 1. 2020年度 全国オンライン研修会の概要

全国研修会は、学習指導要領についての理解を深め、指導方法や評価方法等の工夫改善、初等中等教育の芸術系教科等における指導の充実に資することを目的として開催された。オンラインにて実施された令和2(2020)年度は、全国から合計1,000名を超える芸術系教科の教諭・指導主事等が参加し、1日間の研修として、午前中は学習指導要領の趣旨を踏まえた理論領域の研修、午後からは校種・テーマ別の実践領域の研修というカリキュラムで実施された。

表 全国オンライン研修会 スケジュール(第1回・第2回共通)

日程	内容
8:30 ~	受付開始
9:30 ~ 9:45	開講式及びオリエンテーション
9:45 ~ 10:25	全体研修
10:25 ~ 10:45	休憩・準備
10:45 ~ 11:45	理論研修(教科・科目別)
11:45 ~ 13:00	昼食・準備
13:00 ~ 16:00	テーマ別 実践研修(教科・科目別)*
16:00 ~ 16:10	休憩・準備
16:10 ~ 16:30	研修の振り返り(教科調査官による総括)

\*第1回は令和2年12月3日に、第2回は令和3年2月22日に行われた。  
※音楽分科会・テーマ別実践研修の内容は、12ページ掲載の内容一覧表を参照。

## 2. 研修を通しての学び —音楽分科会・テーマ別実践研修を中心に

ここでは、校種・テーマ別に実施された音楽分科会における〈テーマ別実践研修〉に焦点化し、研修を通しての学びに迫りたい。講師が研修の中で実際に語った言葉や受講者の言葉を引用しながら、各講座の学びの視点を紹介する。

### 1 教材の選び方 —「素材の魅力」を意識する

「楽器を探索する行為が音楽づくりへの期待感を高める」。  
これは、**研修①**にて、トガトンを用いた音楽づくりの事例が紹介された際に語られた言葉である。この研修では、子どもにとって、切られた竹という「モノ」でしかなかったトガトンが、音の出し方とその特徴を子ども自身が見つけ、音を重ねていくことによる表現の広がり気付き、音楽づくりの活動が展開されていく過程が取り上げられた。トガトンという楽器の「素材としての魅力」を教師が意識し、その可能性を子どもとともに探していくことが重要なのである。

また、**研修②**では、GarageBand(デジタルデバイス)を用いた音楽づくりの実践として「多重録音」の試みが提案された。川上氏はGarageBandの使い方を一通り説明した後で、まず身近にあった「ペンケースのファスナーの音」を録音することを提案し、実際に鳴らして音を確認した上で「ファスナーの音をギロに見立てて」演奏した。ファスナーのジグザグとした音を、ギロの特徴的な音色とリンクさせたのである。さらに、川上氏は「この音に重ねて合う音を探す」として、アプリ内に入っているビートや、その他身の回りの楽器の音などを実験的に重ね、再生して確認し、修正していく過程を繰り返し行った。ICTツールを使用する利点として、録音することで自身の音を即座に聴いて確認することができる点があるが、川上氏は「直感的に面白い音」を採用しすぐ記録できることについても言及していた。子どもが様々な音素材と対話するプロセスをも記録できるという点で、ICT活用の可能性が提示された研修であった。

身近な「素材」でありながら、教材とは結び付きにくい「自分の名前」を取り上げた**研修④**は、ユニークな創作の実践である。アベタカヒロ氏は、中学校で自身が行った創作実践を紹介し、「あなたの名前は世界に一つだけ」とその唯一性を強調する。旋律をつくる際には、名前のイントネーションが音の動きのガイドとなる。イントネーションを確認する際、アベ氏は「自分自身だと気づかない場合もある。その場合は、友だちに呼んでもらって一緒に考える」ことを提案した。名前というもともと身近にある「素材」だからこそ、自分自身で、また時にはグループで確認したりする中で、その特徴や面白さを新たな面から発見することができる。この創作活動を通して、子どもたちの自身の名前への愛着がさらに深まると同時に、自身のイメージに合う音を選ぶという学び方につながるのではないだろうか。

志民教科調査官は〈研修の振り返り〉のなかで、「音素材・設定する条件によって、子どもの思考の中身が変わる」と述べた。子どもたちが音と対話することに没入できる時間を大切にすること、その意義が確認されたように思う。



研修② 講師：川上統 [担当大学：エリザベト音楽大学]

## 2 提示の仕方 —無理のないアプローチで

アベ氏が**研修④**の中で提示した実践例は2つである。1つは先に紹介した「自分の名前」を使った創作、もう1つは「和音構成音(コードトーン)でつくる」というものである。前者が「言葉」によるアプローチと考えるならば、後者は「コード進行」によるアプローチである。これらはいずれも創作の手立てとして実践しやすい方法であるが、さらにアベ氏が提示した活動の流れ=提示の仕方が本実践の重要な核であったように感じる。

1つ目の名前による創作の実践では、最初にリズムを、次に言葉のイントネーション(発音の上がり下がり)をもとにした音の動きを、というように要素に分けて音楽の断片をつくり、最終的にその断片を組み合わせて旋律を創作した。アベ氏は「因数分解するかのように、部分をひとつひとつでわかりやすくなる」と語っていた。受講者アンケートの回答にも「複合的な要素をひとつひとつ分解してつくことで、思いやイメージを表現するという方向性を失わずに、かつ、生徒にも無理のないアプローチでメロディーができていく」という言葉が寄せられていた。音楽づくり・創作の活動に対して苦手意識を抱えている教師であっても、アベ氏が提示した「ひもといてつくる」という方法は、非常に取り組みやすい方法であるにちがいない。

他方、2つ目の和音構成音から創作する実践は、はじめに伝えたいメッセージを考え、その上で構成音から音を選択してつくるという流れで展開された。アベ氏は研修の中で「伝えたい思いがあって、その思いやイメージを伝えたい

からつくる」、「創作することは表現すること」と繰り返し述べていた。これは、**研修⑤**において荻久保和明氏が同じくコードトーンから旋律を創作する際に、2小節を単位として音を確認しながら「自分のつくりたい雰囲気に応じた音を選んで」と述べていたこととリンクする。

構成音から音をただ選択するだけでは、選んだ音によってできあがった旋律に何の思いも重ねられてはいない。伝えたい思いを先に決めることによって、その思いを表現するために必要な音が選択され、与えられたリズムによって命が吹き込まれる。佐野靖氏が「創作は自分と向き合う作業である」と語ったように、自分の思いと音とを往還する中で、自身に寄り添った無理のない旋律が生まれるのではないだろうか。

また、提示の仕方という点で、**研修③**において、講師を務めた藤原道山氏が提案した鑑賞指導の方法をご紹介したい。藤原氏は、我が国の伝統音楽の様々なジャンルを取り上げて解説しながら、能と歌舞伎を例に「歌舞伎の演目を見た後で同じ演目の能を見る」つまり「時代を遡って」見てみると理解しやすいと提案した。歴史的な時間の流れに沿って取り上げるのではなく、あえて今の時代に近い音楽から遡り、知っていくことで、その共通点や違いに目を向け、理解しやすくなるというのである。この学び方のコツは、子どもの学習活動に生かせるだけでなく、教師自身が我が国の伝統音楽の様々なジャンルについて学ぶ際のコツにもなりうる。深い学びへつなげるために、活動やその学びの内容に自分自身との接点をもたせていくことが重要であることが示唆された。

研修④ 講師：アベタカヒロ [担当大学：東京藝術大学]

研修① 講師：石上則子、市川恵 [担当大学：東京藝術大学]

### 3 子どもの発想に委ねる

音楽づくり・創作をテーマにした研修で共通して議論されたこと、それは子どもの発想をいかに拾い上げ、広げていくかについてである。

石上氏・市川氏による研修①では、手拍子による即興的なリズム遊びの実践や言葉を用いたリズム創作の授業実践例の提示の中で、教師が提示した条件を子どもが逸脱した際に「子どもと一緒に新しいルールをつくっていく」ことの必要性が議論された。条件の逸脱をNGとするのではなく、そのよさや面白さを教師が価値づけ、新しい表現の可能性として認めるということである。そのためは、教師が子どもの自由な発想を丁寧に拾い上げ、みとることが何より重要となる。

アベ氏(研修④)は、伝えたいメッセージを決めて和音構成音から創作する実践について、いざ演奏してみると「使える音として提示していない音や突飛な音」が出てくることがあったという。ただ、「それもその子なりの表現であり、いたずらにそれは違うとは言わない」、自身が子どもの作品と向き合う際には「どこかにいいところがある」というスタンスで作品をとらえるとアベ氏は語った。実際、研修の中で紹介された中学生の男子生徒の作品では、うまく記譜ができず、音高がアバウトでリズムも明確ではなかったが、アベ氏は『めっちゃ』『モテたい』という言葉に対する音の動き(跳躍と上行し駆け上がる感

じ)がいいね」と語りかけ、男子生徒の「めっちゃモテたい」というメッセージに合う伴奏をつけてピアノで演奏した。記譜されたものが完全なものではなかったとしても、楽譜からその子のこだわりを拾い上げて認めること。それを見出す眼と感性が教師には求められる。

荻久保氏(研修⑤)は、「倚音を取り入れた子がいたら、ダメと言わず褒めてあげてほしい。ポップスでは多用されている倚音を知ること、子どもたちの音楽の世界は大きく広がる」と述べ、川上氏(研修②)は、「その子一人一人のよさがある」「子ども一人一人の個に寄り添うことを大切に」と指摘する。いずれも、まずは子どもたちの発想を認め合うことから始めよう、という教師へのエールである。

音楽づくり・創作の授業においては、教師の用意した道筋と結果に向けて授業をするのではなく、一人一人の子どもとその音楽とに向き合い、対等なスタンスでそのよさを認め合っていく授業づくりが重要である。

研修⑤ 講師：荻久保和明 [担当大学：東邦音楽大学]



研修③ 講師：藤原道山 [担当大学：徳島文理大学・東京藝術大学]

#### 4 感性と経験と表現と 個性のあるところ

「感性を育てること、それは経験を育てることだ」。

これは、**研修③**の講師、尺八演奏家の藤原道山氏が受講者に語った言葉である。

藤原氏は研修の中で、自身が中学校で行ったアウトリーチにおける鑑賞の実践を紹介し、受講者である教師を対象に、同じ方法で鑑賞を行った。具体的な方法としては、1) 楽曲名やその曲に対する背景を説明せず、はじめに藤原氏による生演奏を聴く、2) 演奏を聴いた後、2つの質問（質問①：どのようなイメージをもったか、質問②：曲にタイトルをつけるなら？）を投げかける、3) クラスで回答を共有した後、楽曲名を明かし、曲に対する説明をした上で、同じ楽曲を再度生演奏で鑑賞する、である。

質問①②について、中学生たちは、身近な風景、マンガやアニメなど、自身が日常で触れてきたものを引き合いに出しながら回答していた。藤原氏は、イメージを素直に表現できる子もいれば苦手な子もいることに触れながら、「苦手な子はただ経験が足りないだけなのかもしれない」と語り、「イメージは経験から生まれてくるのではないかと述べた。

鑑賞の学習においては、その音楽のよさや美しさを自分なりに味わい、多くの場合、自分の言葉で表したり書き記したりすることが求められる。自身のイメージをどのような形容詞を用いて表すか、さらには語彙のストックから自分にしっくりくる言葉を見つけ出し、どのように組み合わせるのか、この思考過程には音楽科の学習だけでなく生徒自身の経験全てが総動員される。経験の中で芽生えた感情が言葉として蓄えられ、音楽と出会ったとき、そのイメージ

を形容する表現として結びついていく。だからこそ、「感性を育てること、それは経験を育てることだ」と藤原氏は語ったのである。

この藤原氏の言葉は、受講者である教師自身にも向けられていた。ある受講者は受講アンケートで以下のようにコメントした。「日本音楽は難しい音楽ではない。私自身も生徒たちも苦手意識があるのは、“経験値”が足りないから。“知ること”“経験すること”の積み重ねがいろいろな音楽への世界を広げる」。藤原氏の言葉に触発され、経験して知ることの喜びをモチベーションに、受講者である教師たちによって様々な授業が展開されていくことを期待したい。

ところで、研修会の中で、藤原氏が鑑賞実践で演奏した楽曲は『寒月』であった。楽曲名を明かし再度鑑賞した後、藤原氏は以下のように述べた。「梅が咲き始めた頃の、澄んだ空に浮かぶ月の情景を描いた曲。ただ、各々がそれぞれの寒さ、それぞれの月の明るさを感じ、それぞれの夜の暗さ、梅の香りを感じてくださったのではないかと」。楽曲の背景を知ることによってイメージが方向づけられることは確かだが、言葉の表現を超えた先にある個々の感性は多様で自由である。この点について、筆者は**研修④**で取り上げられた中学生のワークシートの言葉がリンクした。アベ氏の和音構成音での創作を終えて、「音楽を創作するとは？」という設問に、ある中学生は以下のように記述した。「似たようなメッセージの人がいたが、音の組み合わせ方やリズムが違った。文字で書くと思えば似てしまうが、考えている思いはまた別なのではないか」。これは、「グループで創作していても、表したい思いや意図は生徒個々によって違うはず。だからこそ、生徒一人ひとりの思いや意図が見える指導を」という河合教科調査官が

〈研修の振り返り〉にて言及した言葉につながる。経験の積み重ね、積み重ねの先にある個の感性、表現の多様性。研修を通して、表現することの真髄に触れることができたように思う。

## 5 プロの語る言葉の「真実味」

各研修では、日頃指導する側の教師が学び手となって、実際に創作をしたり鑑賞を体験したりするプログラムが多く組み込まれた。

研修⑤では、指定された4種類のコードから1つを選び、受講者自身が旋律創作をして発表した。受講者が創作に入る前に、荻久保氏は1音1音取り上げて例示しながら、「落ち着いた雰囲気」にしたいのか「緊張感」を出したいのか、音の動きによってもたらされるニュアンスを解説した。作品発表では、受講者の作品を荻久保氏が演奏しながら、「順次進行と跳躍とのバランスがいい」、「何気なく使ったリズムも、もう一度使われることで無駄にならない」、「指定されたコードはE7だが、ここでソ#(G#)ではなくソ(G)を採用したセンスが素晴らしい」など、プロの作曲家ならではの視点でコメントをした。また、受講者が質疑応答の場面で「休符の扱い」について質問をした際には、「休符はあたりに置くとモチーフ感が出る」「音に主体的な意思が宿る」と述べていた。

研修④の創作実践でも、作品発表の場面が多く設定され、アベ氏も同様に、受講者の作品を取り上げ、分析的に読み解き、メロディーの描く稜線の美しさ、リズムと言葉との関わり、方言のイントネーションによって導かれた音の動きの面白さなど、その作品のよさを解説した。さらには、

受講者の作品に即興でハーモニー付けをして伴奏し、「そっと想いに寄り添った旋律で、大事に歌いたくなる曲。旋律が下の音域に下がっていくので、高音域で伴奏したくなる」と述べ、メロディーの展開に合わせて伴奏する音域を変化させてみたり、「このメッセージにはもっと緊張感を出したい。リズムカルとはまた違う、力強い伴奏が似合う」と、ベースラインのはっきりした、刻みの多い伴奏型で弾いてみたりするなど、受講者の作品に寄り添って伴奏を模索する姿を見せていた。荻久保氏・アベ氏が受講者の作品と真摯に向き合う姿と眼差し、語った言葉は、受講者自身が子どもへ向けて語りかける言葉に生かされていくにちがいない。

研修③では、受講者アンケートに「日本音楽の奥深さを本では読んでいても、実践者に語られると真実味が増す感覚だった」という回答が寄せられた。我が国の伝統音楽の様々なジャンルについて、藤原氏がどのようなつながりで解説をするのか、また、楽器や奏法について、どのような表現で語るのか、その一言一言が受講者の知識に「真実味」をもたせていったのではないかと考える。

講師を務めた専門家たちの生きた言葉や音・音楽に対する眼差しは、受講者にとって多くの気付きと、日々の授業への活力と刺激につながったにちがいない。



荻原史織(はぎわら・しおり)

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。同大学大学院音楽研究科博士課程音楽文化学領域(音楽教育)修了。東京藝術大学芸術教科研修推進室特任助教。共立女子大学非常勤講師。



音楽と関連させながら生徒たちにさまざまな教養を伝える馬場先生

# 授業者に 訊く

今回の「授業者に訊く」でご紹介するのは、愛知県立松蔭高等学校の1年生の授業です。他教科との連携からヒントを得たユニークな創作の授業では、生徒たちが豊かな発想力で表現している姿が印象的でした。対談では、生活や社会の中の音楽を意識しながら、生徒たちに伝えていることや大切にしていることについて、お話を伺いました。

**授業者：馬場大輔**（愛知県立松蔭高等学校）

**聞き手：長谷部裕介**（神奈川県立相模原弥栄高等学校）

※取材は感染症対策を講じたうえで2021年3月に行われたものです。  
顔写真撮影時のみ、マスクを外しています(18ページ下、20～21ページ)。

## 本時の授業の位置付け

○授業テーマは「言葉とリズム」。クラス全員でストーリーを創作する。

○教養として「食事とマナー」を取り上げ、オノマトペや動きを言語化したセリフを、リズムにのせて表現する。

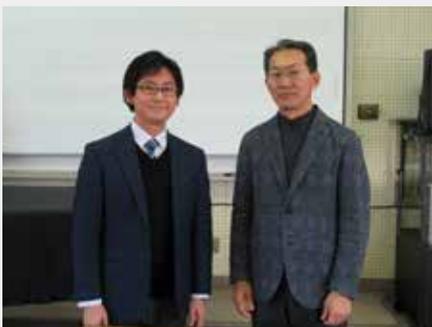
家庭科との協働から端を発した授業ですが、コロナ禍で調理実習が不可能になり、独自の動きに変更しました。授業の流れとしては、美食家でもあったロッシェニのオペラ『セビーリャの理髪師』の鑑賞をきっかけに食の世界へ。ねらいは、「①クラス全員で協力して一つのストーリーを仕立てる」「②食とマナーを知る」「③全員が楽譜<sup>\*</sup>を書く」の3つを掲げました。

※この授業独自の書法だが、記録として残せて再演可能なもの

## 授業の流れ

### 学習の内容、学習活動

- ・ いろいろな食とマナーについて調べる。
- ・ 似た内容を調べた生徒どうしてグループをつくり発表する(知識の共有)。
- ・ 食のコースを決める(4クラス中、フレンチ2クラス、イタリアン1クラス、懐石1クラス)。
- ・ 希望する担当ごとにグループをつくる(調理、サービス、解説、客)。
- ・ 自分の受け持つ担当について具体的に研究する。
- ・ 流れを決めて言語化する。
- ・ クラス全体で大まかな流れをすり合わせる。
- ・ 記譜の確認をする。
- ・ 前後のグループで拍数を確認する(自分のセリフの出のタイミングを確認)。
- ・ 試演を録画して意見交換する。全体を通して15分前後のパフォーマンスにまとめ、本番に臨む。



長谷部裕介先生(聞き手)と馬場大輔先生(授業者)

## 生徒の発想を引き出す創作活動 —— 豊かな教養とともに



ビデオカメラで撮影しながらリハーサルを行う

### 他教科との連携から 生まれた授業

**長谷部:** フランス料理のフルコースをテーマにしたユニークな授業でした。レストランでの情景をラップ調で表現し、生徒全員がリレー形式で発表していましたね。このようなスタイルの創作ができるまでに、どのような経緯があったのでしょうか？

**馬場:** 一昨年までは家庭科と組んでいたんです。調理実習で「井を作る」という授業があったので、それをテーマに創作の授業をしていました。4人ずつのグループに分かれて、持ち時間3～4分で発表させていましたが、今回はクラス全体でやってみようと考えました。まずは

調べ学習として、和食、イタリアン、フレンチ——このクラスはフレンチを選びましたが——レストランやマナー、シェフについてなど、自分の好きなことを調べてくるように伝えました。

**長谷部:** 調理実習のアイデアがベースにあったのですね。

**馬場:** 近年流行の他教科とのコラボレーションです。音楽の授業なのに調理実習のプリントが配られて、「あれ？音楽のプリントじゃない。先生、配るもの間違えてます！」というところから始まる。昨年からはコロナ禍で調理実習ができなかったので、コース料理をテーマにした創作になりました。

**長谷部:** フレンチのフルコースに挑戦したのは今回のクラスだけでしたか？

**馬場:** いえ。フレンチが2クラス、イタリアンが1クラス、和食の懐石のあとにお茶のお点前というのが1クラス。和食のクラスはネタが細かくて大変でした。お茶だけで20分ぐらいかかりそうで。コンパクトにするのは意外と難しく、生徒たちは全体像が見えるよう工夫してカットするのに苦労していました。

**長谷部:** 全体を仕切るのは先生ですか？

**馬場:** 仕切るのは基本的にサービスパーソン役の生徒です。最初に料理の段取りをホワイトボードに書かせます。そして、解説をする生徒、料理を作る生徒、お客役の生徒という具合に、それぞれのパートがやりたいことを記入しながら全体像が全員に見えるよう設計図を作っていました。例えば、サービス役とお客役が



聞き手 長谷部裕介(はせべ・ゆうすけ)  
神奈川県立相模原弥栄高等学校 音楽科教諭

展開を打ち合わせして、電話で予約する場面のやりとりから始まっていきます。

**長谷部:** 高校生が予約の電話の流れを分かっているのはすごいですよね。

**馬場:** 「予約のときはこうするんだよ」というのは最初に話しましたが、あとはイ

ンターネットで上手に調べていました。

**長谷部:** うまい仕掛けだなと思いました。最終的には言葉をどうのせるか、リズムをどうするかといった音楽的なことに向き合わせたいところですが、先にフルコースやマナーのことに興味をもたせながら、するっと本題に入っていたように見えました。

**馬場:** 「こういうことをやるよ」という全体像が見えていないと、生徒は手が止まってしまうですね。「こういうストーリーなんだよ」「レストランに行って君たちはどうする?」「知らないと将来デートで困るよ(笑)」というような話をするだけでも生徒たちは興味をもちます。いわゆる方向付けですよ。そのうえで、「話の上手な人は声色やアクセントを変えたり、間をもたせたりするでしょ」というふうな、大事な言葉のときはどう表現すればよいかを考えさせたりしています。

## 作文を音楽にする

**長谷部:** 作曲の授業というのと、生徒にとっても教員にとってもハードルが高いと思うのですが、どんな工夫をされていますか?

**馬場:** 五線譜に音符を書くという行為をしないで「創作」をさせるのがこの授業のテーマです。僕は作曲が専門なので、生徒がつくった旋律に対してアドバイスはできるけれど、今どきの曲はファ～シの増音程を使うこともよくあるし、生徒たちもドミソの和音にシやファの音を

平気で合わせてきます。それに対する価値観も違うので、「書けてよかったね」という評価しかできない。ですから、作曲ではないけれど「言葉を音符にして作文を音楽にする」というのが今のところベストかなと思っています。

**長谷部:** 音符を書かせるとなると、一部の生徒だけが書いて、分からない生徒は見ていただけになってしまいがちですからね。

**馬場:** 生徒たちの楽譜のハードルに気付いてから、何とかできないかと探っているうちにこういう形になりました。音符を書かせると、拍を数えるところで立ち止まってしまうので。今回のような作文の方法なら、全員が書くことができます。最初に文章を書いて、できた流れをもとにまずは小節線を書いてみるんです。

**長谷部:** 方眼紙に書くという方法もありますが、使うことはありますか?

**馬場:** 方眼紙は使いません。方眼紙は枠に収めて書くという制限がありますよね。なるべく直感的に表せるよう、「大きい音のところは大きい字で書いたらどう?」といった提案をしています。生徒たちが記譜に広い面積を使っているところは、彼らにとって大事な部分であることが多いのです。

**長谷部:** 正直なところ、最初に資料を見せていただいたとき、この授業は馬場先生にしかできないことなのかなと思ったんです。でも、まず全体像の仕込みをしたうえで生徒に調べさせて、調べたことを作文で表現させていくという手順を踏めば、僕でもできそうだと感じますし、読者の方にも参考になりそうです。

**馬場:** 今回はレストランがテーマでしたが、例えばサッカーでもできると思いますよ。ここでディフェンスして、パス、ゴール! という内容でも。僕としては、オペラを観る前にフレンチに行って、こんな食事をして、ワインも飲んで……というイメージを生徒と共有したかったのが、今回のような展開になりました。大人になった自分像なので、たしなみの一つと



本番の様子。レストランに予約の電話をする



※生徒が実際に書いた譜例

してワインも取り上げています。

## “拍の共有”を意識して

**長谷部:** 発表ではそれぞれのグループの個性が出ていましたね。3連符で変化を付けたり、「ジュウジュウ」「カチャカチャ」といった調理音を入れたりするなど、おもしろい発想がみられました。複数人で音を重ねることでポリリズム的な音楽にもなっていました。生徒たちが考えたのですか？

**馬場:** 「人数を生かして、1人ではできないことをやろう」と言ったら、早い段階であのような発想になっていました。

**長谷部:** 練習、リハーサル、本番で演奏が変化していくのもおもしろかったです。最初のうちは自分たちがやろうとしているテンポから外れてしまうこともありました。本番ではちゃんとできていました。

**馬場:** このクラスは分かりやすく変化していましたね。生徒たちのテンションも上がってって、テンポもよくなりました。流れがとぎれないよう、「前のグループの拍をちゃんともらっておく」というのを前回の授業で指導していたので、前のグループの発表から拍をカウントして自分たちの出番になったらタイミングよく入ることができていたように思います。“拍の共有”ですね。

**長谷部:** 先生の声掛けでさすがだなと思ったのが、「<sup>う</sup>聞<sup>を</sup>を空けないで」と言った直後に、「いや、意図があったら空けてもいいんだけどね」とおっしゃったことです。やっていけないことはない、という感覚は大事じゃないですか。そこでクリエイティブな発想を引き出そうとされているのだらうと思いました。

**馬場:** 発表前に一呼吸置かないと出てこられない生徒も中にはいるんですよ。それが分かっていたので、そういう声掛けをしました。声掛け以外にも、目で「今だ!」と伝えたり、ボディランゲージを使ったりしています。

**長谷部:** 自分たちの出番以外の時間も、しっかりビートを感じながらみんなが参加している様子でしたね。

**馬場:** 一体感を出すために「全員でやってね」というのは常々言っています。

**長谷部:** 今までに、この創作のベースになるような曲を扱ったことはありましたか？

**馬場:** ボディー・パーカッション《Plymouth Rock》(教育芸術社『MOUSA1』より)に取り組みました。足で拍を打つのも、予備拍を取らないとできないですね。前の拍をどのように扱うのかを、この教材でずいぶん練習したんです。また、ダウンビートとアップビート、重い拍と軽い拍を教えて、手拍子を打つときに感じてもらうようにしました。今回の発表でも1拍目がダウンビートになっていましたね。予備拍を意識できていたのだと思います。

## 授業の中に教養を ちりばめる

**長谷部:** こうした創作の授業を通して、生徒たちのものの見方も変わるだろうなと感じました。

**馬場:** 最初のガイダンスのとき、生徒たちには「音楽だけの授業なんてやらないよ」と伝えました。音楽って生活の中に必ずあるものじゃないですか。レストランに行ったらBGMがかかっているし、電車の発車の合図もそうだし。「音楽なしでみんな生きていけるの?」と、冗談も交えながら常に問い掛けをしていますね。昨日は2年生にブリティッシュ・インヴェイジョンのことを話しました。軽音楽部の生徒に「今やっているロックの原型はここにあるから聴いてみて」と話しながら名盤を紹介していくうち、商業音楽の歴史に話題が移って……というふうに、幅広い内容に触れています。

**長谷部:** 振れ幅の大きい授業をされていて興味深いです。

**馬場:** 『ブルース・ブラザーズ』という昔の映画をもとに、人種差別やゴスペルの話



授業者 馬場大輔(ばば・だいすけ)  
愛知県立松蔭高等学校 音楽科教諭

をしたこともあります。そこからキリスト教にはカトリックとプロテスタントという大きな宗派があって……というところに言及して、「この間のアメリカ大統領選挙はどういうことで争っていたのか知ってる?」といった時事的な話題につなげたりもしました。

**長谷部:** 次から次へと、何が出てくるのか分からない授業ですね!

**馬場:** とにかく音楽も教養の一つという意識なんです。生徒がだらけそうになるときってありますよね、そういうときにこうした話を投げ掛けてみる。そうすると生徒も耳を傾けるようになって、「先生、これってどういうことなんですか?」といった質問も出てくる。だから、無駄話の



手拍子を打って拍を感じながら発表する

ようで無駄ではないと思っています。

**長谷部:** 楽しいですよ、そういう時間。

**馬場:** 僕自身、「自分がいちばん楽しむ」と決めています。音楽をやっていて楽しくなかったら意味がないし、楽しむ気持ちは生徒たちにも負けたくない(笑)。

**長谷部:** 僕も、生徒から「先生がいちばん楽しんでるじゃないですか」と言われると、しめしめと思います。

**馬場:** 「この時間は楽しいんだよ」ということを生徒に感じ続けてもらうのは、実はすごく大変ですよ。鑑賞なんて、工夫しないとただ聴きだけの時間になってしまいます。僕は鑑賞中に後ろで同時解説をするんですよ。「今の動きはこういうことだよ」「この服はこんな意味を表していて……」と、観どころや聴きどころを教えないと文化が違うので生徒たちには分からない。僕らが能や文楽を観に行っても、初めのうちはよく分からないじゃないですか。例えば『セビーリヤの理髪師』の鑑賞でも、途中で映像を止めて「ほら、客席もすごく笑っているよ」と教えると、生徒たちも安心して笑いだす。オペラって笑っていいんだと。鑑賞の授業は生徒が絶対に眠くならない

ように仕向けます。

**長谷部:** コロナ禍で音楽の授業は鑑賞の比率が高くなっていますけれど、そうした工夫は参考になります。

**馬場:** 鑑賞には、教員も生徒も事前学習が必要ですね。『セビーリヤの理髪師』なら、理髪師というのはどのような仕事な



対談の様子

のかを詳しく説明するし、その当時の貴族のことや身分差別の話もする。フランス料理をテーマにした今回の創作にも、「ロッシェニ風の〜」というセリフが出てきましたが、実は鑑賞からのつながりがあります。

**長谷部:** なるほど！ あれはそういうつながりだったんですね。

**馬場:** ちょっとした遊び感覚なんですけど、「ロッシェニ？ そんな音楽家もいるんだ」という話から始まり、どこかで何かとつながること——ここでは料理ですけれど——を意識付けしていきました。

**長谷部:** 馬場先生の授業では、そうした教養が1年間ちりばめられているんですね。生徒たちは授

業を楽しみに音楽室に入ってくるのだらうなと想像できます。今日の授業を拝見しているだけでも、そうした積み重ねがあってよい雰囲気ができているのを感じましたし、僕もその世界に浸らせていただきました。

馬場先生が作成した授業プリントは、教育芸術社のホームページでご覧いただけます。また、今回の授業で行われた生徒たちの発表を音声でお聴きいただけます。



[https://www.kyogei.co.jp/data\\_room/vent/vol47\\_jugyosha.html](https://www.kyogei.co.jp/data_room/vent/vol47_jugyosha.html)

### 校長先生より

戸倉 隆 先生  
愛知県立松蔭高等学校校長  
※職名は取材時(2021年3月)のものです。



創立80周年を迎えた本校は、近所の松並木の街道から「松蔭」という名が付けられました。部活動が盛んで、和太鼓部が7年連続で全国高等学校

総合文化祭に出場しているほか、サッカー部やハンドボール部も全国大会の出場経験があります。キャッチフレーズは“部活動の盛んな進学校”で、生徒たちはエネルギーにあふれています。「あいちラーニング推進事業」に指定されており、「主体的・対話的で深い学びの推進」をテーマにした研究授業も行われています。

## 収録の様子



八千代少年少女合唱団



女声合唱団 ゆめの缶詰



Youth Choir Aldebaran

### 開催を終えて

#### — 新作合唱曲による公開講座 —

## Spring Seminar

2021

#### ● スプリングセミナーとは ●

教育芸術社が主催する新曲発表会です。合唱界で人気の高い作曲家が、演奏会やコンクールの自由曲として歌える新作合唱曲を書き下ろします。発表されるのは、同声・女声・混声の各2曲(全6曲)。各作品について作曲家、合唱団、司会者と学び、指揮者が指導のポイントを紹介するほか、作曲家自身による楽曲解説も行われます。セミナー終了後、「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーを行います。

※「スプリングセミナー2021」ではワンポイントレクチャーは実施しておりません。

教育芸術社主催による「スプリングセミナー」では、2013年のスタート以来、毎春欠かさず新曲をお届けしてきました。

2020年春に開催する予定であった「スプリングセミナー2020」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、やむをえず中止とさせていただきますが、ここで初演を予定していた作品は、2021年5～6月に動画配信による「スプリングセミナー2021」でようやく発表することができました。

この度の動画配信では、6曲の新作合唱曲を多くの方々にお届けするために感染症対策を講じて、出演者とともに収録に臨みました。新しい作品を作曲家、合唱団、司会者の3者がまとめ、つくり上げていく様子が収められたこの映像は、動画ならではのよさも加わり、あらためて音楽のすばらしさを認識できる内容となっております。

本セミナーを視聴して下さったの方々、また興味をもっていただいたの方々、そしてご協力を賜りました多くの方々に厚く御礼申し上げます。今号では、本セミナーの開催後に司会者と作曲家の方々からいただいたメッセージをご紹介します。

#### 藤原規生(ふじはら・のりお)

国立音楽大学声楽学科卒業。ヴァチカン国際音楽祭では2017年より西本智実指揮、イルミナート合唱団の合唱指揮を務め、2019年はサンピエトロ大聖堂での《ローマ法王代理ミサ》で、グレゴリオ聖歌「オラショ」指揮を担当。洗足こども短期大学・国立音楽大学附属高校講師、日本合唱指揮者協会副理事長、オペラアーツ振興財団事務局長。



#### 藤原規生(司会)

「スプリングセミナー2021」。2年越しではありましたが、幾重にも重なる様々な想いを持って、新しい音楽の息吹を皆様のもとにお届けさせていただきました。

収録、配信というこれまでのセミナーでは味わえない環境となりましたが、そこに関わる全ての皆様のひたむきな思いは、対面でされていた時と同様に、誠実で、何より溢れる音楽の喜びに満ちていました。そして再会の喜びを分かち合いました。

混沌とした日々の中でも、今回誕生した素晴らしい6つの作品がきっとまた新たな希望の光を照らしてくれる、そう強く信じています。

心の底から音楽を楽しめる日々が世界中に戻りますように!!



東京音楽大学TCMホール(収録場所)

### Spring Seminar 2021

出演者 〈司会〉 藤原規生  
〈作曲家〉 同声合唱: アベタカヒロ、大熊崇子  
女声合唱: 土田豊貴、横山潤子  
混声合唱: 三宅悠太、木下牧子  
〈合唱団〉 八千代少年少女合唱団  
長岡亜里奈(指揮)、相澤ますみ(ピアノ)  
女声合唱団 ゆめの缶詰  
相澤直人(指揮)、河野紘子(ピアノ)  
Youth Choir Aldebaran  
佐藤洋人(指揮)、須永真美(ピアノ)

収録 2021年3月27日(土)東京音楽大学TCMホール

「スプリングセミナー2021」で発表された各作品の楽譜は、『オリジナル合唱ピース』として販売中です(巻末参照)。また、音源は音楽配信サイトでご視聴いただけます。



『すてきな友よ』



『いる』



『夕暮ー女声合唱とピアノのためのー』

アベタカヒロ

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。第20回かぶらの里童謡祭作曲公募で最優秀賞を受賞。合唱と童謡を軸に幅広く活動中。横浜市芸術文化教育プラットフォームにおける小学校での合唱制作授業は毎年好評を博している。教育芸術社より合唱曲「友達の友達」、「うち 知ってんねん」他発表。一般社団法人日本童謡協会理事。



『すてきな友よ』

くらたこのみ 作詞／アベタカヒロ 作曲

同声

歌う人、指導する人、ステージを作る人の徹底的な日々の感染症対策があってコンサートは実現されます。本当に頭の下がる思いです。私の見えないところでみんなが入念な準備をされ、ついに2年ぶりにスプリングセミナーが実現したというのはとても感慨深いものでした。

今回、まるで何かの撮影現場に入り込んだようではじめは緊張しましたが、そろそろ慣れないといけませんね！ マスク越しでみんなの顔をよく確認できなかったのは残念でしたが、それ以上にみんな明るくてちゃんと未来のことを考えていて、音も前方にバンバン飛んでくる感覚がありました。やっぱり子どもたちからは元気ももらえます。忘れそうになる感覚、大事にしたいです。

『いる』

谷川俊太郎 作詞／大熊崇子 作曲

同声

配信によるスプリングセミナー2021で新曲発表とセミナーをさせていただき、主催者の方々、素晴らしい演奏を披露して下さった八千代少年少女合唱団、司会の藤原先生、そしてご視聴いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

1年以上制約のあるこの状況は、私たちに音楽の大切さを再認識させ、音楽活動を渴望する気持ちをもたらしていることでしょう。だからこそ今回のような形であれ、改めて音楽を楽しむと同時に、慈しむ気持ちをもって言葉や音に接していただきたいと思いました。

これから音楽の方向性は変わっていくかもしれませんが、それでも意思をもった普遍的な音楽を作っていこうと思っています。



大熊崇子(おおくま・たかこ)

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。昭和60年度笹川賞合唱曲部門第1位。「さくら」「予感」「じゃあね」など合唱作品多数。一昨年度「わたしはこねこ」など過去5回NHK全国学校音楽コンクール課題曲を作曲。また現在、東京藝術大学オペラ研究部でバレエピアノも担当している。日本作曲家協議会会員。

『夕暮ー女声合唱とピアノのためのー』

谷川俊太郎 作詞／土田豊貴 作曲

女声

スプリングセミナー2021の収録を終え、「やっぱり音楽は楽しい！」という気持ちと共に、作曲家は作品を演奏してくださる多くの方々から、沢山の希望と幸せを与えていただいていたのだと改めて実感いたしました。

歌うことが制限され、特に生徒、児童の皆様にとっては先行きが見えない不安定な状況にもかかわらず、日々、試行錯誤を重ねながら音楽と向き合われていると思います。おこがましいことではございますが、作曲家としての活動が皆様の音楽活動の一助となれるよう、頑張りたいと思います。



土田豊貴(つちだ・とよたか)

1981年、東京都生まれ。桐朋学園大学音楽学部・カレッジディプロマ作曲科修了。第21回朝日作曲賞受賞(合唱組曲)。第87回NHK全国学校音楽コンクール・高等学校の部課題曲の制作を担当。第3回東京国際合唱コンクール・ユース部門の課題曲制作を担当。これまでに作曲を法倉雅紀、鈴木輝昭、ピアノを三輪郁の各氏に師事。



『ふゆはたまもの』



『ひとめぐりー混声合唱とピアノのためのー』



『冬と銀河ステーション 混声合唱とピアノのための』

横山潤子(よこやま・じゅんこ)

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院修了。おもに合唱・室内楽の分野で活動中。

主な作品集 『横山潤子作品集 同声編1・2』/合唱曲集『ここに海があって』『たましいのスケジュール』『きんぼうげの日々』『笑いのコーラス』『妖精の市場』『青のアルバム』『ひとつぶの種子』『ドゥーニのヴァイオリン弾き』/編曲集『時代』ほか



## 『ふゆはたまもの』

覚和歌子 作詞/横山潤子 作曲

女声

コロナ禍の幕開けから季節はひと巡りしたものの、息苦しいことには変わりなかった今春。それでも、あのようにスプリングセミナーを開催してただけました。たくさんの方々のご尽力があったからこそと、心から御礼を申し上げます。親しみのある顔ぶれに会えるのは、やっぱり嬉しいですね！合唱団の皆さんのニコニコが、お歌が、ナマ！河野先生がナマ！藤原先生や相澤先生のお話が楽しい！だけじゃなく、ちゃんとためになる佳いお話！こうやって、み〜んなにつくっていただくんだな、と改めて思いました。

それと普段から自分がいかに考えナシで喋り散らかしてるかも、改めて。塗り潰したい。動画のお陰にございます。気をつけたいと思います。

## 『ひとめぐりー混声合唱とピアノのためのー』

覚和歌子 作詞/三宅悠太 作曲

混声

コロナ禍に世の中が包まれていった昨年、「こんな時だからこそ音楽を」・「ピンチをチャンスに」…いろいろな言葉が社会に溢れました。感化されつつも、正直なところ個人的にはそういった風潮に疲弊していたことも事実でした。「前を向くエネルギーもいいけど、今はじっと足元を見つめたい」…私はそんな風感じていた一人です。

あれから1年の歳月が流れ、コロナ禍は想像以上に長期化し、合唱界隈は厳しい状況が続いています。しかし昨年と比べますと、「前を向きたい」という思いが自然と溢れてきています。2年越しの開催&無観客収録となった今年のスプリングセミナー、新たな一歩を踏み出すこの機会に、作曲家として参加させていただけたことに、特別な幸福感を感じています。



三宅悠太(みやけ・ゆうた)

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位、第79回日本音楽コンクール作曲部門(オーケストラ作品)第1位。管弦楽・室内楽・舞台音楽・合唱作品ほか多岐にわたる作編曲を手がけ、2016年にはNコン高校の部課題曲「次元」の作曲を担当。聖心女子大学、都立総合芸術高校各講師。

木下牧子(きのした・まきこ)

作曲家。管弦楽、吹奏楽からピアノ曲までその活動は幅広く、特にヴァラエティ豊かな声乐作品は抜群の人気を誇る。東京藝術大学作曲科首席卒業、同大学院修了。日本交響楽振興財団作曲賞入選。三菱UFJ信託音楽賞奨励賞受賞。主要作品に、オペラ「不思議の国のアリス」、ピアノ・コンチェルト、吹奏楽「ゴシック」、合唱組曲「方舟」他。出版多数。CDも「管弦楽作品集〜呼吸する大地」(オクタヴィア レコード)ほか多数。

公式サイト

<https://kinoshitamakiko.com>



## 『冬と銀河ステーション 混声合唱とピアノのための』

宮沢賢治 作詞/木下牧子 作曲

混声

昨年3月末のセミナーは中止となってしまいましたが、今年は無観客ながら、響きの良いホールでの素晴らしい初演が配信されました。ぜひお聴きになってみてください。演奏する上で、生き生きとした表情は不可欠ですが、今回はウイルス感染予防のため、やむを得ずマスク着用となりました。

日本は不幸中の幸いで、死亡者数は諸外国と比べかなり少なめでしたが、にもかかわらず、音楽や演劇への風当たりはかなり強いものでした。自粛の日々で作曲家にできたことは、いつも通り自分の美学に忠実に、誠実に作品を描き続けることだけでした。マスクをとって演奏できる日が戻った時、歌い手や聴き手の皆さんに、少しでも生きる喜びを感じて頂ける作品を書けたら、と思いつきながら作曲していました。

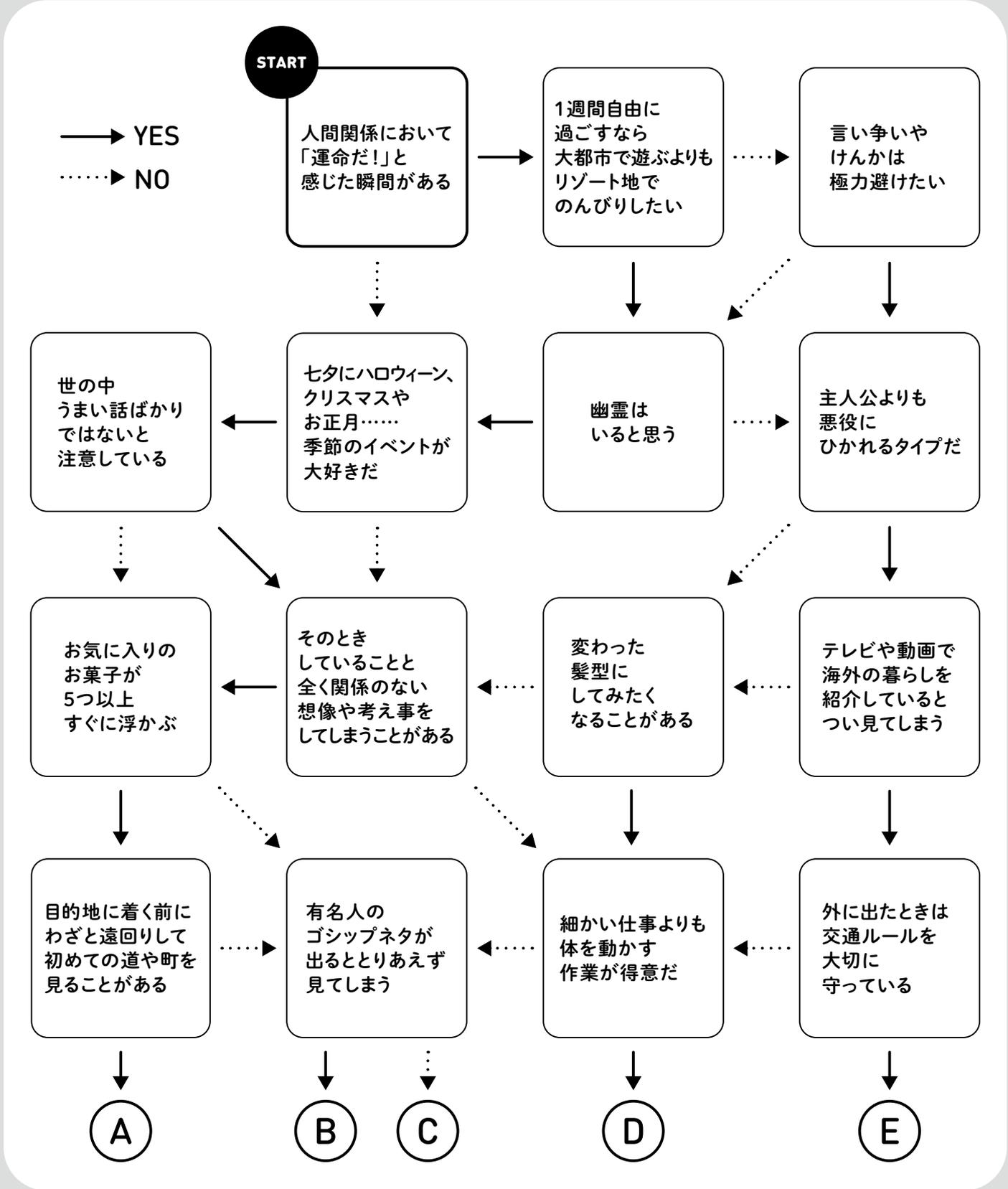
# 音楽診断

## 第12回 おすすめ名作バレエ編



『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第12弾。  
5つの名作バレエの中から、あなたにぴったりの作品をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生  
Text = Haruo Yamada



## A 夢の世界の旅物語 チャイコフスキー『くるみ割り人形』

[初演：1892年／ Санктペテルブルク マリンスキー劇場]

『くるみ割り人形』はチャイコフスキー(1840～93)の三大バレエの一つ。E.T.A.ホフマンの童話が原作となっている。クリスマス・シーズンの定番バレエである。「花のワルツ」など、おとぎの国で様々な踊りが繰り広げられる第2幕が見どころ。クリスマス・イヴのパーティで少女クララはくるみ割り人形をもらう。真夜中、ネズミの大群とくるみ割り人形に率いられた兵隊人形たちが戦闘を繰り広げている。クララがスリッパを投げて、くるみ割り人形の窮地を救い、ネズミの大群にも勝つ。くるみ割り人形は、王子に姿を変え、おとぎの国にクララを招待する。おとぎの国では次々と歓迎の踊り(アラビアの踊り、ロシアの踊り、中国の踊り、花のワルツなど)が披露される。



## B 古典バレエの代表作 アダン『ジゼル』

[初演：1841年／パリ オペラ座]

アダン(1803～56)は、フランスのバレエやオペラの作曲家。彼の代表作である『ジゼル』は1841年に初演された。ハイネの「ドイツ古譚」のなかの伝説に基づいている。ロマンティック・バレエの先駆的作品である。

村娘ジゼルは、出会ったロイスに恋をしてしまうが、ロイスは実はアルブレヒト伯爵であり、パチルド姫という婚約者がいるのであった。真実を知ったジゼルは正気を失い、息絶えてしまう。後悔したアルブレヒトは、ジゼルの墓を参るが、そこには結婚前に死んだ娘たちの霊(ウイリ)がいて、通りがかった男たちを死ぬまで踊らせようとする。亡霊となったジゼルはアルブレヒトの今も変わらない愛を知り、彼をウイリたちから守ろうとする。



## C バレエの楽しさを堪能できる喜劇 ドリーブ『 Coppélia 』

[初演：1870年／パリ オペラ座]

ドリーブ(1836～91)はフランスのバレエやオペラの作曲家。パリ音楽院でアダンに学んだ。ドリーブの代表作である『Coppélia』は1870年に初演された。原作は、E.T.A.ホフマンの小説『砂男』。この小説は、オッフエンバックのオペラ『ホフマン物語』のもとにもなっている。

スワニルダの恋人フランツは、Coppéliusの作った自動人形Coppeliaにそれとは知らず恋をしてしまう。嫉妬したスワニルダは、Coppéliusが留守にしている間に彼の家に忍び込み、Coppeliaが自動人形であることを知る。帰宅したCoppéliusは、スワニルダが扮したCoppeliaに翻弄され、Coppeliaに会いに来たフランツも真相を知る。スワニルダとフランツは友人たちの祝福を受けて結ばれる。



## D 衝撃的な初演から20世紀の傑作に ストラヴィンスキー『春の祭典』

[初演：1913年／パリ シャンゼリゼ劇場]

2021年はストラヴィンスキー(1882～1971)の没後50年にあたる。20世紀のクラシック音楽の巨人は案外、近年まで存命であった。『春の祭典』は、ストラヴィンスキーの三大バレエの一つであり、比較的初期の作品といえる。1913年のパリでの初演では、音楽や舞踊の斬新さゆえに音楽史上に残る大スキャンダルを巻き起こしたが、今では20世紀の傑作の一つとして広く親しまれている。

この作品では、太古ロシアの、春の到来とともに太陽神に乙女を捧げる原始的な儀式が描かれている。つまり、大地が目覚め、春が到来し、誘惑の儀式、春の踊り、賢者の行列、大地の踊り、乙女たちの神秘的な集い、いけにえの賛美、祖先の呼び出し、祖先の儀式などを経て、最後にいけにえの踊りに至る。



## E 見どころの詰まった恋物語 チャイコフスキー『白鳥の湖』

[初演：1877年／モスクワ ボリショイ劇場]

『白鳥の湖』もチャイコフスキーの三大バレエの一つ(あとの一つは『眠りの森の美女』)。チャイコフスキーにとって最初のバレエであった。白いチュチュを着て踊る、バレエの代名詞的な作品といえる。「情景」でのオーボエが歌う哀愁を帯びた旋律が特に知られている。

オデット姫は、悪魔ロットバルトによって白鳥に姿を変えられてしまったが、夜だけ人間の姿に戻る。王子ジークフリートは、オデット姫を愛するようになるが、王宮の舞踏会で、ロットバルトの策略によって彼の娘オディールをオデットと間違えてしまう。しかし、オデットは悲しみを乗り越え、ジークフリートをゆるす。ジークフリートとオデットは、ロットバルトを打ち負かし、魔法が解ける。そして二人は結ばれる。



### 山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ～大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人～ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

## 研究大会

### 通常開催

**11月5日(金)**

第63回 北海道音楽教育研究大会 空知岩見沢大会  
まなみーる 岩見沢市民会館・文化センター 他

〈全道共通主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

〈大会主題〉

わかる楽しさ できるよろび わかちあう感動  
～響きあい、深まる音楽の学びをめざして～

※当日の研究発表・協議のオンライン配信、アーカイブ配信あり。

【問い合わせ】

運営委員会事務局

美唄市立東中学校 教頭 野村勝紀(事務局長)

〒072-0801 美唄市東7条北2丁目1-1

TEL 0126-63-2610/FAX 0126-63-5257

### オンライン開催

**11月19日(金)～12月17日(金)**

令和3年度 第63回 関東甲信越音楽教育研究会  
山梨大会 (オンライン開催)

〈大会主題〉

「確かな学び 広がる音楽」  
～知覚・感受をもとにした  
音楽的思考力・判断力・表現力等の育成～

※オンライン(オンデマンド方式)による開催。

※11月19日(金)～26日(金)に授業実践報告を配信。

※12月10日(金)～17日(金)に研究演奏、全体会、指導講評を配信。

◆申込み期間: 10月上旬～11月5日(金)

【問い合わせ】

第63回 関東甲信越音楽教育研究会山梨大会 事務局

大月市立初狩小学校 校長 梶本 宏(事務局長)

〒401-0021 山梨県大月市初狩町下初狩1144

TEL 0554-25-6303/FAX 0554-25-6361

kajimoto-uvuc@es-jhs.kai.ed.jp

**11月19日(金)**

第17回 東海北陸音楽教育研究大会 福井大会  
第14回 福井県学校音楽教育研究大会  
福井・鯖丹大会(小中学校及び高等学校)  
(オンライン開催)

〈大会主題〉

求める 深める つながる 音楽の学び

※公開授業、研究演奏はオンデマンドで事前配信。

※研究協議、講評・講演等は11月19日(金)にリアルタイム配信。

◆詳細についてはQRコードより大会ホームページをご確認ください。申込みは「参加申込みフォーム」より受付中です(<https://www.tourikuonkenfukui.com>)。

【問い合わせ】

事務局 福井市六条小学校 校長 川崎隆夫(事務局長)

〒918-8133 福井県福井市上筋生田町5-16

TEL 0776-41-1010/FAX 0776-41-1549

t-kaw987@fukui-city.ed.jp



**11月19日(金)**

第63回 近畿音楽教育研究大会 京都大会  
(オンライン開催)

〈大会主題〉

感じ取ろう 音楽の魅力 見つけよう 音楽の秘密

※リアルタイム配信の1日開催を予定。

※研究発表は授業映像(録画)を含めた実践報告とする。

※指導講評(教科調査官)、記念講演も映像配信で行う。

※研究演奏は行わない。

【問い合わせ】

京都市立西陣中央小学校 校長 綿越貴久(大会会長)

〒602-8441 京都府京都市上京区大宮通今出川上ル観世町135-1

TEL 075-432-5522/FAX 075-432-5523

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会やイベントなどの情報も掲載しています。



[https://www.kyogei.co.jp/data\\_room/event/](https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/)

## 誌面開催

令和3年度 全日本音楽教育研究会  
全国大会八戸・三戸大会(総合大会)  
第69回 東北音楽教育研究大会 八戸・三戸大会  
第40回 青森県音楽教育研究大会 八戸・三戸大会

### 誌面開催

〈大会主題〉

ひろげよう つたえよう こたえよう

※提案授業は11月5日(金)、11日(木)、17日(水)に地域限定(青森県内)で公開。  
※大会集録の発行は令和4年2月頃予定。

[問い合わせ]

全日本音楽教育研究会全国大会 八戸・三戸大会事務局  
五戸町立倉石中学校 教頭 工藤正義(事務局長)  
〒039-1702 青森県三戸郡五戸町倉石中市字上ミ平36  
TEL 0178-77-2022/FAX 0178-77-2244  
kuraishi-chu@town.gonohe.aomori.jp

第52回 中国・四国音楽教育研究大会 高知大会

### 誌面開催

〈大会主題〉

かかわる つながる ひびきあう

[問い合わせ]

事務局  
津野町立葉山中学校 校長 石川雅啓(事務局長)  
〒785-0213 高知県高岡郡津野町白石丙155  
TEL 0889-56-3116/FAX 0889-40-2302

第62回 九州音楽教育研究大会 大分大会  
第62回 大分県音楽教育研究大会 大分大会

### 誌面開催

〈大会主題〉

感じとろう つながろう そして楽しもう  
～心豊かな未来を創造する音楽の学び～

※提案授業は11月18日(木)に地域限定(大分市内)で実施。  
※大会集録の発行は令和4年3月頃予定。

[問い合わせ]

大分市立横瀬小学校 校長 榎島菜穂子(実行委員長)  
〒870-1173 大分市大字横瀬1109-1  
TEL 097-541-5582/FAX 097-541-5491

## — 新作合唱曲による公開講座 —

## Spring Seminar

2022

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2022」を開催いたします。

同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を作曲家、司会者、合唱団と学びます。

- 収録による動画配信の形式で開催いたします。
- 閉会行事後の「Nコン課題曲ワンポイントレクチャー」は実施しません。
- 詳細や最新情報は弊社ホームページ等でご確認ください。

- 動画配信：2022年春開始(予定)

- 司会：藤原規生

作曲家：[同声] 信長貴富、横山裕美子

[女声] 山下祐加、大田桜子

[混声] 三宅悠太、なかにしあかね

- お問い合わせ：

株式会社教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168

FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

最新情報は、スプリングセミナーの

Facebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgspringseminar/>



新

# 音から広がる世界

第7回

「出会い18  
クロマティック」

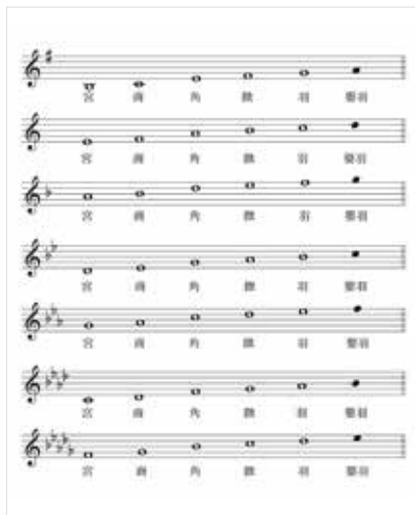
藤原道山

「邦楽と洋楽では音階が違うのに、洋楽の作品をよく演奏できますね!」。洋楽器とのコラボレートや西洋のクラシック音楽の作品を多く演奏する私が、デビュー当時から今までよく言われる言葉ですが、皆様の認識はいかがでしょうか? 出会い15「ピッチと音程」の際にも少し書いたのですが、西洋は七音音階、日本は五音音階、だから出ない音がある、と思っている方が結構いらっしゃるようです。確かに半音階や転調を多く含んだ作品を演奏するのは大変なことです。しかし、尺八でオクターヴ内の12音が出ない、ということではありません。

我々、江戸時代に発達した邦楽の演奏をしているものとして、もっともよく用いられている音階は、<sup>うえはらろくしろう</sup>上原六四郎が明治時代に記した『俗楽旋律考』によりますと、都節音階(陰旋法)だといわれています。もちろん、他にもいろいろな考え方がありますが、我々にとってはこの考え方が大本になっておりますので、今回はこれに沿ってお話を進めていきます。よく演奏する古典の作品の音階をさまざまな調で[譜例]として記します。これを標準の一尺八寸管の楽器で演奏するのですが、見ていただきますと、1オクターヴの中の12音を全て網羅しています。もちろん、一曲の中でこれらの音を全て使う作品は古典ではないのですが、4つ程の調を行き来することは普通に行われます。邦楽も12音全部を使用し、転調することがあるのをお分かりいただけましたでしょうか? 考えていただければ分かると思うのですが、指孔が5つ空いているわけですから、それを少しずつ開ければ無限に音を作ることができるのです。ただ、使う組み合わせや音の運びが西洋音楽と違うということなのです。

さて、日本にもこの12音に対応する名前がそれぞれあります。我々はDから表記することが多いので順に記しますと、壺越(いちこつ:D)、断金(たんぎん:D#)、平調(ひょうちょう:E)、勝絶(しょうぜつ:F)、下無(しもむ:F#)、双調(そうちょう:G)、鳧鐘

(ふしょう:G#)、黄鐘(おうしき:A)、鸞鏡(らんけい:A#)、盤渉(ばんしき:B)、神仙(しんせん:C)、上無(かみむ:C#)となります。ちなみに雅楽では五行思想に則って季節ごとに、春は双調、夏は黄鐘、秋は平調、冬は盤渉、各季節を繋ぐ土用は壺越と調子が決まっています。



[譜例]



左からオークラウロ、尺八(五孔)、七孔尺八

尺八を始めた時に「これを覚えなさい」と言われたのですが、小学生だった私には普段使わない漢字ばかりで、覚えるのに難儀したことを思い出します。その時に、「いったん、ひょうしょう、しそ、ふおう、らばしか」と順番に唱えると覚えやすい、などと言われて覚えたものです。また、普段よく使うのは壺越、平調、

双調、黄鐘、盤渉、神仙で、それ以外はほとんど使うことはありません。「鳧鐘の音が低いよ」と言われてどの音かパッと反応できる人は、邦楽をやっている人でも少ないのでは？

中学生のころ、とある新しい作品を聴いていて、その曲の解説を読んでいたときのこと、「洋楽では簡単なことが邦楽では難しい」と書いてありました。その作品は西洋音楽の書法で書かれており、西洋の和声や音階を用いられた作品で、尺八のパートを一音一音ハッキリと発音しつつ、滑らかに旋律を演奏するのは確かなかなか難しいものでした。そのような作品を和楽器で演奏するのはどうなんだという議論もされたようですが、大正時代から西洋音楽を和楽器で演奏することはあったようです。そして、そのような作品を演奏するにあたって、さまざまな試みがなされてきました。

古いものでは宮城道雄の八十絃の箏。ピアノのように絃を80本、半音音階でチューニングした楽器で、ピアノやハープでは余韻にヴィブラートをかけることが出来ないが、この楽器ではヴィブラート、ベンディングなどの演奏が可能ということが売りでした。しかし、残念ながらこの楽器のための作品は生まれず、最後は戦争の空襲で焼けてしまいました。その後、三十絃や二十絃、二十五絃の箏が考案されますが、クロマティックの調弦ではなくダイアトニックの調弦が基本となっています。作品でも中能島欣一なかのしまきんいちがクロマティックに調弦した箏の作品『伽藍がらん』を作曲していますが、箏の絃の調整を普通のようにすると箏柱こしじがぶつかってしまい、この曲のためだけに調弦しなくてはならないのと、十三絃の箏ですと、1オクターヴしか音を作ることができませんので4パートの作品となり

ました。このような作品は他に作られませんでした。

管楽器では「オークラウロ」とよばれる、尺八の歌口を持つ、フルートを縦にして演奏する楽器が考案され、ソプラニーノ、ソプラノ、アルト、バスまで作られ、普及会が結成されて作品も生まれましたが、これも姿を消していきました。最近になって、新たに作る動きも出てきていますが、普及するまでは至っていません。また、普通の尺八が五孔であるのに対して、七孔や九孔の楽器も作られています。私は五孔の楽器しか演奏しないのですが、孔を多くすることで出しにくい半音を出すことが出来るので、ある程度普及しています。しかしながら、クロマティックの楽器は作られていません。他にもクロマティックに作られた笙など、開発はされましたが、普及には至りませんでした。

私の師匠は、五孔でどんな作品でも演奏しておられました。その中で、『無伴奏尺八組曲第2番』という十二音音階を使用した作品を見事に演奏され、五孔の楽器で新たな扉を開かれました。その姿を見て私もさまざまな可能性にチャレンジしてきました。私も同級生の作曲家・川島素晴かわしまとほる氏が作ってくれた尺八のあらゆる技巧を全て盛り込んだ難曲『尺八のためのエチュード』を演奏して、尺八の可能性が広がったと思います。最近では、ジャズの『ジャイアント・ステップス』のアドリブ部分を完全にコピーして演奏するアメリカ人の尺八奏者がいます。

このクロマティックの音楽の考え方も、時代とともに淘汰洗練されながら変遷してきました。特に、尺八は五つの孔では出来ないと思われてきたからこそ、発想を転換して果敢に挑戦した結果、それが可能となり当たり前になってきました。楽器を変えるのではなく、今までの技術で出来ることをうまく使い、音楽に活かしていく。何でもまずはやってみて、まだまだ可能性を広げていきたいと思っています。



○ふじわら・どうざん(尺八演奏家)

初代山本邦山に師事。東京藝術大学卒業、同大学院音楽研究科修了。在学中、皇居内桃華楽堂にて御前演奏会に出演。安宅賞、江戸川区文化功績賞、松尾芸能賞新人賞、「季(TOKI)-冬-」で平成30年度文化庁芸術祭優秀賞、令和2年度(第71回)芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。これまでにCD、映像作品等多数発表。伝統音楽の演奏活動及び研究を行うと共に、マリンバ奏者SINSKEとのデュオ、妹尾武(ピアノ)、古川展生(チェロ)との「KOBUDO-古武道-」、尺八アンサンブル「風雅竹韻」などのユニット活動、映画音楽、舞台音楽、音楽監修、NHK「にほんごであそぼ」にレギュラー出演など多岐な活動を展開中。小学校及び中学校音楽教科書(教育芸術社)の執筆・編集及び出演や後進の育成など普及・教育活動にも力を注ぐ。

<http://www.dozan.jp>

## 編集後記

猛暑も少しずつ過ぎ去り、芸術の季節、秋がやってきます。

今号の巻頭では、詩人の谷川俊太郎先生と作曲家の木下牧子先生に、合唱曲『春に』について語っていただきました。谷川先生の「大人が喜ぶものでないと、子どもも喜ばないし、どちらかだけが喜ぶものはつまらない」というお話を聞いて、教科書をつくる私たちも、先生方と子どもたちに必要とされることを、丁寧に発信していきたいと考えました。

参考楽譜には、谷川先生が作詩された『鉄腕アトム』主題歌の器楽合奏を掲載しています。千田鉄男先生による編曲で、コロナ禍でも演奏できるよう配慮した内容になっております。授業や音楽会で演奏していただけたら幸いです。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション  
スズキカノリ

写真撮影  
島崎信一(STUDIO S+PLUS)

写真提供  
手塚プロダクション  
藤原道山

イラストレーション  
こばやしみさこ

表紙デザイン・本文組版  
STORK

## 音楽教育 ヴァン

発行者 株式会社 教育芸術社(代表者 市川かおり)

〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14

TEL. 03-3957-1175(代)

FAX. 03-3957-1174

<https://www.kyogei.co.jp/>

JASRAC 出 2106471-101

©2021 by KYOGEI Music Publishers. ©-21

本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

\*ヴァン="vent"はフランス語で「風」。  
新しい音楽教育の地平を切り開いていく  
願いを込めています。



## Recommend

### オリジナル合唱ピース

- 2021年5月に発売しました。本誌の巻頭特別対談に登場した谷川俊太郎先生と木下牧子先生の作品が含まれます。
- クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの新曲。
  - 【同声編107】すてきな友よ (くらたここのみ 作詞/アベタカヒロ 作曲)
  - 【同声編108】いる (谷川俊太郎 作詞/大熊崇子 作曲)
  - 【女声編60】夕暮 一女声合唱とピアノのための一 (谷川俊太郎 作詞/土田豊貴 作曲)
  - 【女声編61】ふゆはたまもの(寛和歌子 作詞/横山潤子 作曲)
  - 【混声編108】ひとめぐり 一混声合唱とピアノのための一 (寛和歌子 作詞/三宅悠太 作曲)
  - 【混声編109】冬と銀河ステーション 混声合唱とピアノのための (宮沢賢治 作詞/木下牧子 作曲)
- 各定価660円(本体600円+税10%) / B5判



### クラッピング・ファンタジー集

- 長谷部匡俊作曲。手拍子のパートに、ソプラノリコーダー、鍵盤ハーモニカ、ピアノなどの楽器を加えて編成された合奏曲。
  - \* リコーダーや鍵盤ハーモニカのパートは、キーボードなどの息を使わない楽器に替えて演奏することもできます。
- 楽譜集後半には、切り取って使用できるパート譜を掲載。小・中学校の授業や演奏会などに最適。
- 収録曲：クラッピング・ファンタジー 第1番 / 第2番 / 第3番
- 定価880円(本体800円+税10%) / A4判 / 48ページ
- ISBN978-4-87788-571-7



### Clapping Quartets(クラッピング・カルテット集)

- 長谷部匡俊作曲。7曲からなる小品集。グレード順に並べ、終曲は演奏会用として書かれています。
- 基本は手拍子だけで展開しますが、いろいろな楽器を使用してリズムアンサンブルとして楽しむこともできます。
- 定価880円(本体800円+税10%) / A4判 / 16ページ
- ISBN978-4-87788-366-9



### Music Edutainment Application 楽譜が読めるようになる!

#### Vol.1〜リズムトレーニング〜

- 手拍子や打楽器を用いたリズム打ちの常時活動に活用できる、読譜力を身に付けるためのデジタル教材。
- 先生がモニターなどに大きく映して授業で毎回10分間活用することで、楽しみながら楽譜(リズム譜)の内容を理解することができるようになります。
- 「リズムリーディング」では、選んだレベルに合わせて譜例がランダムに表示。
- 「リズムアンサンブル」の練習ができるモードも搭載。
- 価格：シングルライセンス  
19,800円(本体18,000円+税10%)  
◇ 1台のパソコンにインストールして使用することができます。  
※学校内のすべての児童・生徒のPC(タブレット含む)にインストールされる場合の価格については、弊社販売代理店にご相談ください。
- 内容：DVD-ROM 1枚、解説書付き
- 動作環境：Windows 8.1、Windows 10



「ビートトレーニング」一定の拍でリズムを打つ



「リズムリーディング」楽譜を読むことに慣れる

下記ウェブサイトにて、動画サンプルと体験版を公開しています。  
[https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/gakufu\\_vol1/](https://www.kyogei.co.jp/digitaltextbook/gakufu_vol1/)

### みんなでリズムクラッピング

- 本文2色刷りで、キャラクターたちが授業の冒頭の常時活動をサポートします。
- 「リズムクラッピング・エチュード」8曲掲載。
- 定価880円(本体800円+税10%) / A4判 / 16ページ

